

# 伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一七年 第八十三号

伊能忠敬研究会

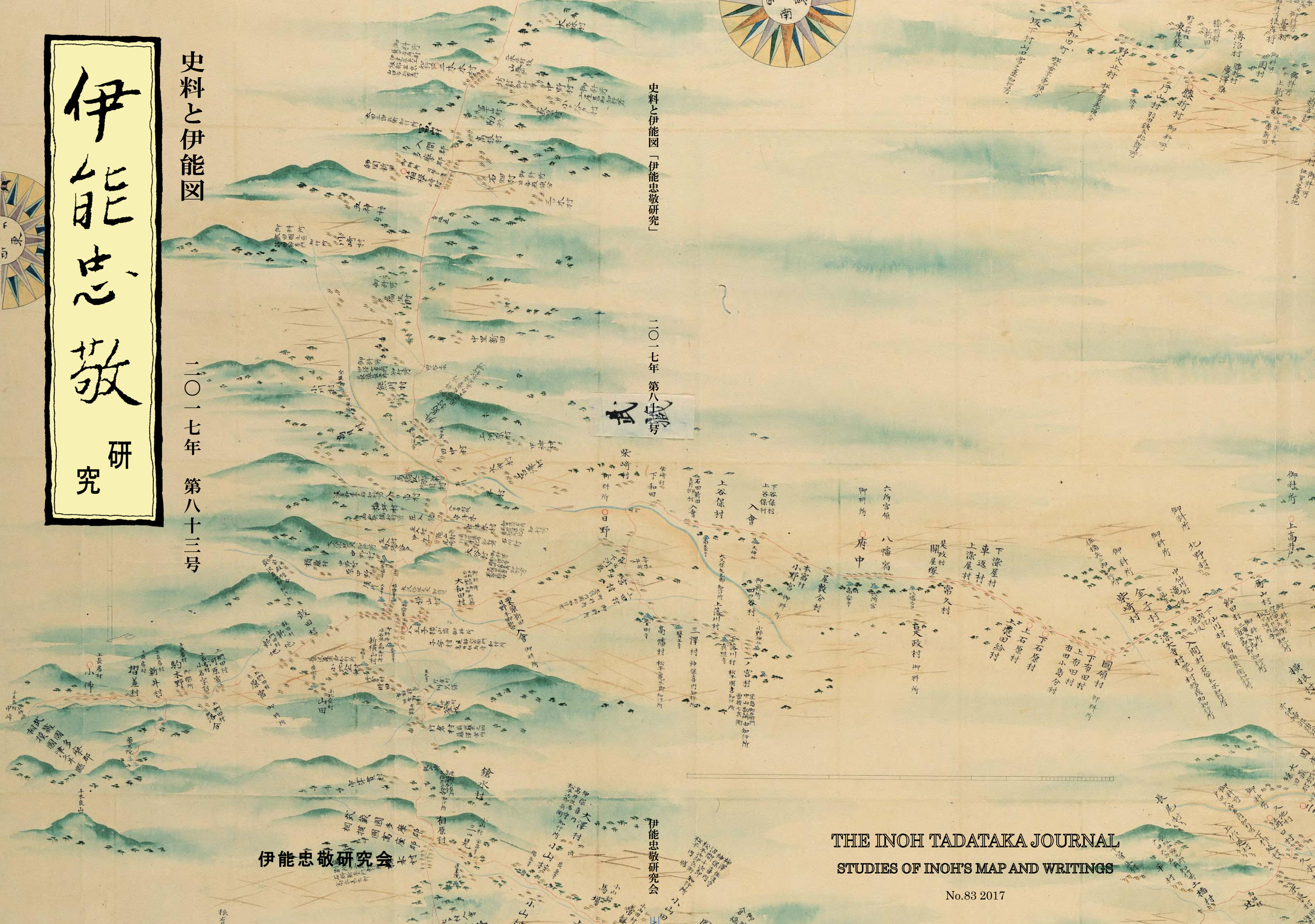
伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇一七年 第八十三号

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.83 2017





国立国会図書館蔵

伊能大図 九十号部分 武蔵 相模

第八十一号の表紙で紹介した伊能大図90号の図の西側である。

この地域は、東京の西部で多摩と呼ばれる。

図の東西と南北に二本の測線が見える。東西の測線は甲州街道で、西の端が相模と武蔵野国境にあたる小仏峠である。測量隊は九州の第七次測量の帰路に甲州街道を西から江戸に向かって測量しており、小仏の峠を越えたのは文化八年(822)五月四日である。

翌五月五日は、本隊が甲州街道を小仏駅から八王子宿まで測量し、支隊は高尾山を測量している。

高尾山へは小仏関所の西側の新井村から登っているが、現在はこの付近に登山道は存在しない。しかし、同時代に描かれた武蔵名所図絵の小仏関所の絵には関所の西側から高尾山の登山道が描かれているから、当時は甲州街道から高尾山に詣でる人の登山口があったのであろう。

五月六日の本隊は八王子宿から府中番場宿まで測量しているが、この日も支隊は日野宿で分かれ多摩川の南側を高幡村から一ノ宮村まで測量している。

その後、高井戸、内藤新宿と甲州街道沿いに測量を続け、五月九日に深川黒江町に戻った。

一方、南北の測線は、第九次測量によるものだが、忠敬はこの測量には参加しておらず、弟子たちの手によって行われた。



第九次の測量は伊豆諸島であったが、この測量の帰りに、伊豆下田から熱海、箱根を通り、平塚から厚木に出て現在の国道16号沿いに北に向かい、八王子から日光街道を通り川越を熊谷から荒川沿いに南下し、文化十三年四月十二日に江戸亀島町に戻っている。

この付近は、江戸時代天領だったことから、知行所の記入が多くみられ、同時代に編纂された新編武蔵風土記稿の記載とよく一致している。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)  
(菱山剛秀)

目次

表紙解説

国立国会図書館蔵  
伊能大図 九十号部分 武蔵 相模 菱山剛秀

研究と話題

- シーボルトから没収した『カラフト島図』  
―伊能図の筆跡との比較― 前田 幸子 1
- 『奥州紀行を読む』 前田 幸子 6

- 加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊  
―「新家文書」より― 河崎 倫代 14

- 伊能忠敬 周辺の人⑧佐藤一斎 前田 幸子 21

資料

- 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十八回  
監修 渡辺 一郎 34  
編著 井上 辰男

忠敬談話室

- 忠敬が宿とした盛田久左衛門家 柏木 隆雄 47
- 篠山市標柱 加賀尾宏一 48  
徳平利加子

- 測量日記にみる一日の測量 菱山 剛秀 50

お知らせ・新入会員自己紹介

忠敬没後二百年記念行事の進捗について 渡辺 一郎 53

新入会員自己紹介 56



国立公文書館に『カラフト島図』と標題がついた地図が収蔵されている。「シーホルト所持品之内方取上候」という付箋が貼られ、文政十二年（二八二九）にシーホルトが国外追放処分をうけた時に没収された地図として知られている。彩色された海岸線に沿って地名がびっしりと書き込まれた一三一×五七cmの小図である。間宮林蔵のカラフト探検の成果に基づいて作成されたことはほぼ間違いなく、林蔵自身の作画であると考えられる研究者も多いといわれる。しかし、いつ、誰によって作成されたかは確定されていない。画像を拡大すると、書入れられた地名の文字に見覚えがある。『日本沿海輿地図』や『フランス中図（ペイレ図）』の文字と酷似している。おそらく同一人物の筆跡であろう。シーホルト事件の霧に包まれた「カラフト島図」と来歴不明の「ペイレ図」。謎めいた二つの地図は忠敬の工房で同じ人物によって作製された可能性が高いのではないだろうか。

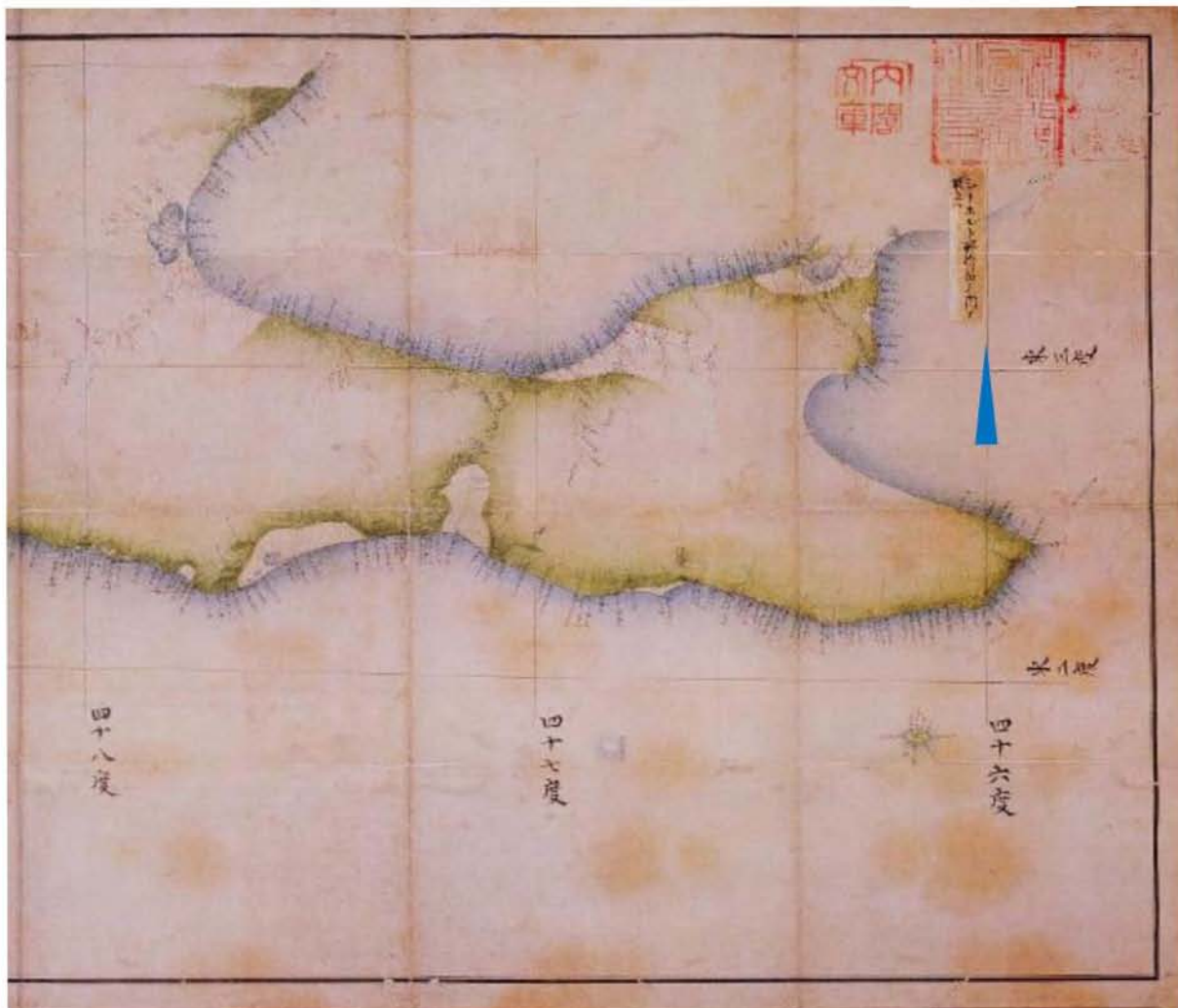


「シーホルト所持品之内方取上候」

(左が北)

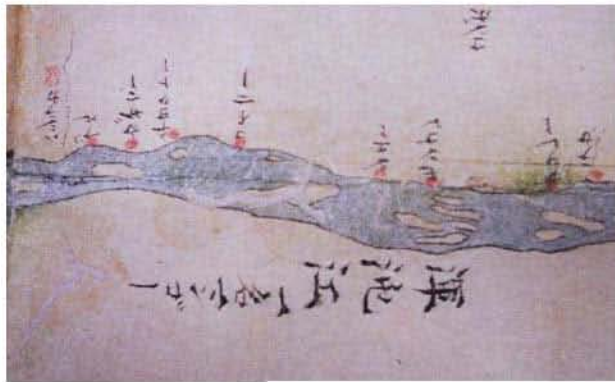


(拡大図)



シーホルトから没収した『カラフト島図』—伊能図の筆跡との比較—

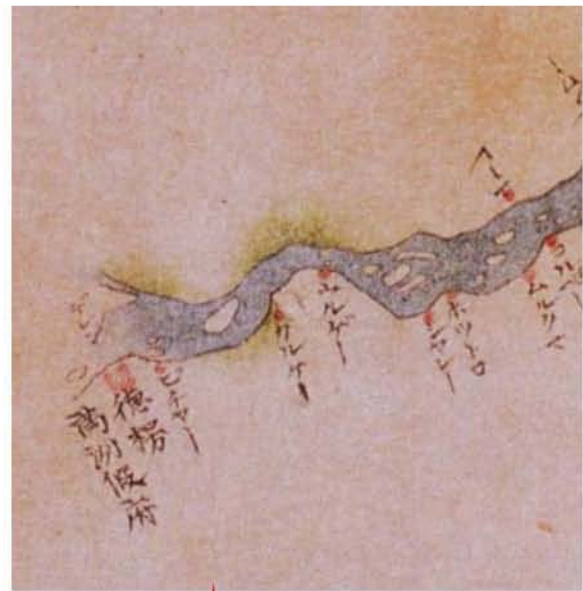
前田幸子



(左が北)

「渾沌江 一名マンゴー」

(拡大図)



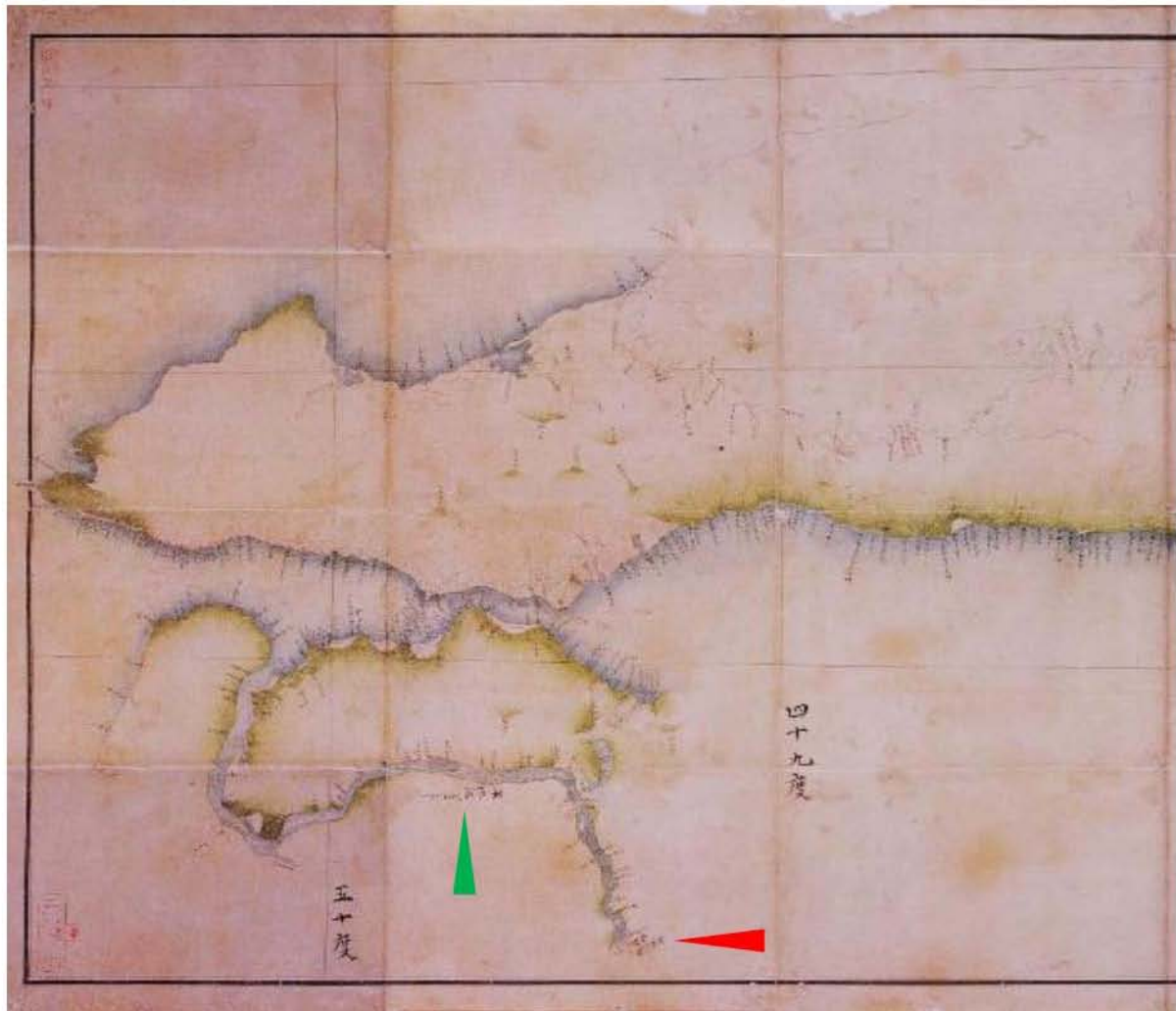
(上が北)

「德楞 満洲仮府」

德楞 (デレン) は間宮林蔵  
が清国役人と会見した地

(拡大図)

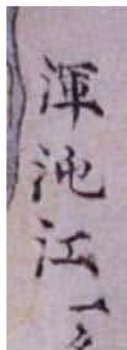
※本図の詳細画像は国立公文書館のサイトで閲覧できる。(検索結果画面の「閲覧(大判)」)







『カラフト島図』全図 左が北 131×57 cm 国立公文書館蔵



『カラフト島図』の筆跡

「東」「度」「十」「四」の字形の特徴が一致している

「江」の字形の特徴が一致している

「府」の字形の特徴が一致している

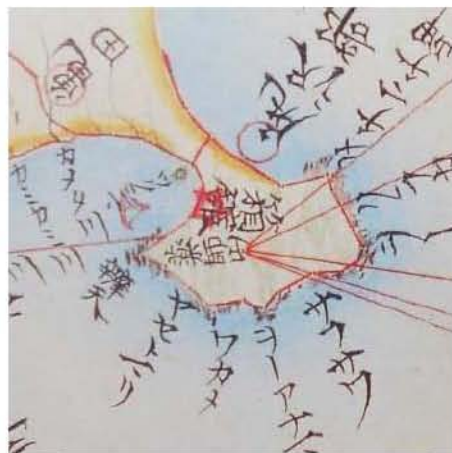
上図の「ウワイトマリ」、「ホロアントマリ」と下図の「ヤマセトマリ」の「トマリ」の字形の特徴が一致している



『フランス中図(ペイレ図)』



『伊能小図』(東博)



『伊能図』の筆跡

『フランス中図(ペイレ図)』



シーボルト事件で逮捕された高橋景保は、奉行所の指示により長崎通詞の吉雄忠次郎宛に「一昨年、シーボルトに送った日本図とエゾ地図を取り戻してほしい」という書簡（下欄）を送った。この書簡中の「エゾ地図」が今回紹介した『カラフト島図』であることは、地図に貼られた付箋により、ほぼ確実にされている。一方、文中の「日本図」のほうは、国立国会図書館蔵「カナ書き伊能特別小図」がその没収された地図であろうと推定されてきたが、決定的な証拠がなかった。しかし近年、カナ書き小図の写図とみられる図がシーボルト側で発見され、これを精査した結果、「高橋景保がシーボルトに渡し、シーボルト事件で幕府に没収され、その間密かにシーボルトが写した日本図とは、カナ書き伊能特別小図にはかならない」ことが確定できた（国立民俗博物館・青山宏夫教授）とされる。昨年開催された「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展にこのシーボルトが持ち帰ったという地図が初公開されて話題となったことは周知の通りである。

なお、国立公文書館には『カラフト島図』のほか、に間宮林蔵の『北蝦夷島地図』（文化七年）七枚が所蔵されている。この地図は『東韃地方紀行』『北夷分界余話』とともに『間宮林蔵北蝦夷等見分関係記録』として重要文化財に指定されているが、これも筆跡が『カラフト島図』と似ており、また色彩や体裁が伊能図に似ているので参考までに次頁に掲載した。

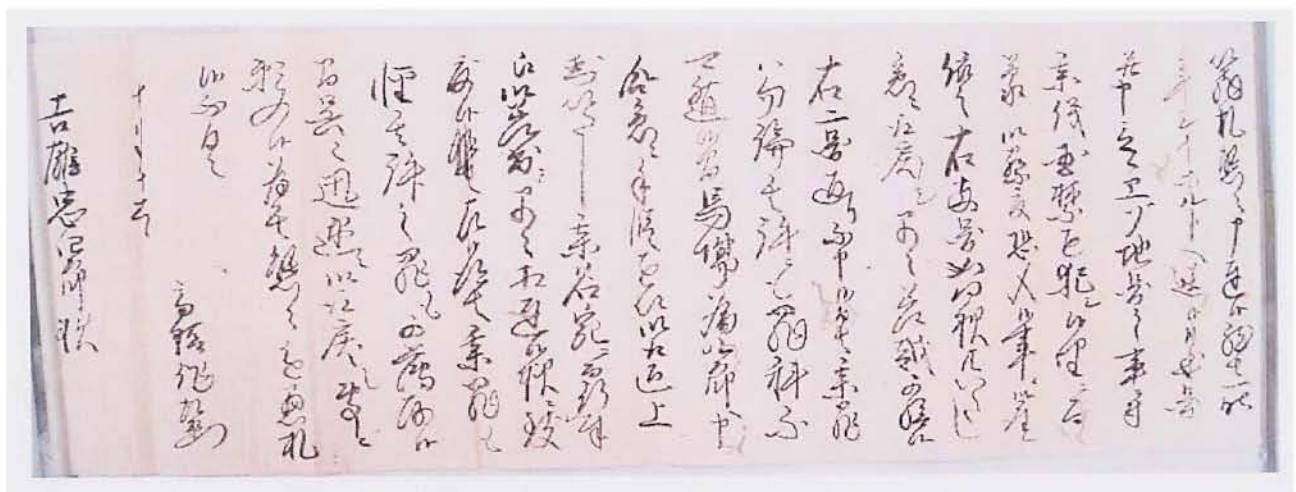
【参考文献】

『伊能忠敬研究』第55号 柏木隆雄 伊能研究会  
『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎

以飛札（飛脚便）態々申達候、然者一昨年シイホルトへ送候日本圖并申立候エゾ地圖之事二付、某儀国禁を犯シ候由二而蒙 御察度（非難）、恐入御事二御座候、依之右両圖如何様共いたし急々取戻シ、早々差越可給候、右二圖返り不申候而者、某罪ハ勿論、其許ニも罪科不可通候間、馬場為八郎へ申含、急々手段を以御取返上封いたし、某名宛ニ而行奉江御差出、早々相達候様二致度候、**律未**左候得者、某罪も輕、其許之罪も可薄存候間、**吳々**迅速ニ御差戻し專ニ頼入候、為其態々進愚札候、不具

十月十六日  
高橋作左衛門

吉雄忠次郎様



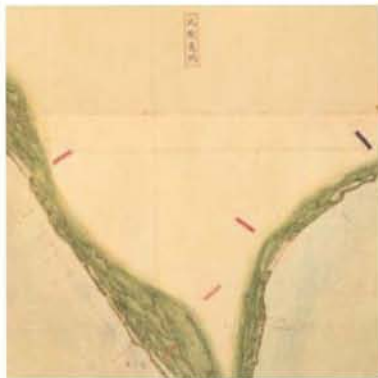
高橋景保書簡（吉雄忠次郎宛）

国立歴史民俗博物館収蔵（柏木家寄託文書）



参考 間宮林蔵『北蝦夷島地図』

国立公文書館蔵 (国立公文書館のデジタルアーカイブで詳細画像を閲覧できる)



北蝦夷地西海岸図第 1



北蝦夷地西海岸図第 4



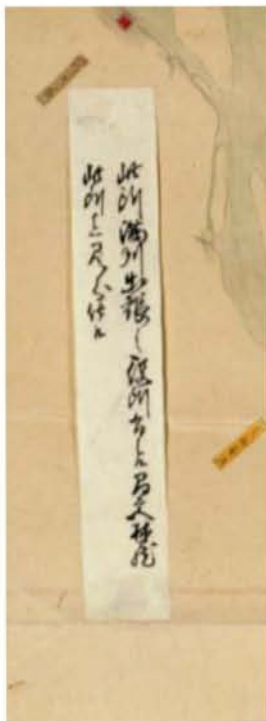
北蝦夷地西海岸・東韃  
地方東海岸迫処図



北蝦夷地西海岸図第 3

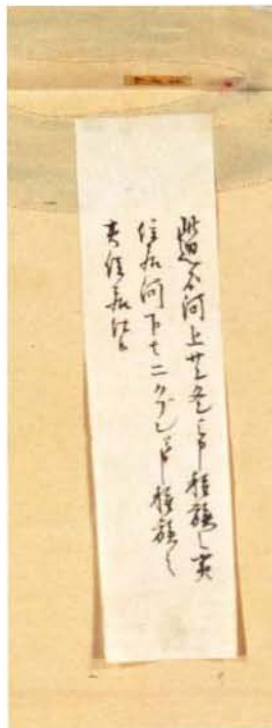


北蝦夷地西海岸図第 5



東韃地図

(付箋) 「此所滿州出張之役所有之候間宮林蔵此所迄見分仕候」

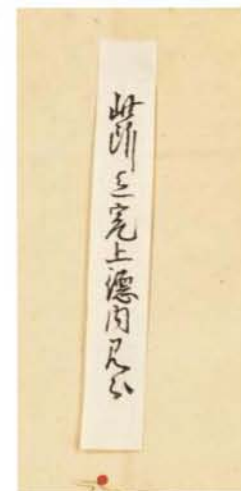


東韃地図

(付箋) 「此辺方河上サンタンと申種族之夷住居  
河下はニクブんと申種族之夷住居仕候」



(地名) 「ホロトマリ」



(付箋) 「此所迄最上徳内見分」

北蝦夷地西海岸図第 2



## 『奥州紀行を読む』

前田幸子

はじめに

『奥州紀行』は忠敬が数え三十四歳の年、安永七年五月から六月にかけて妻・ミチちらと奥州松島に旅行した際の旅行記である。これまで取り上げられることが少なかったが、この旅行記は当時の忠敬の興味や関心の対象、あるいは教養の範囲などがうかがわれて興味深い。壮年期の忠敬を知る貴重な資料ではないかと思う。旅の概略

この旅行は安永七年（一七七八）五月二十八日に佐原を立、往路は海岸沿いに北上して松島まで行き、帰路は内陸を南下して六月二十一日に帰着、計二十四日間の旅であった。旅行者は忠敬とミチ、それに杜氏の清兵衛と辻の利兵衛の四名、用務等は全くの観光目的の、文学と歴史の名所旧跡をめぐる旅であった。

『奥州紀行』は大部分が各宿場間の距離と駄賃に関する簡潔な記述であるが、名所旧跡では故事来歴や古歌などが文人的関心をもって綴られている。また建築物や意匠に対する高い関心もうかがわれ、忠敬の趣味的側面が際立っている。一方、宿場の売女が存在に特段の関心を寄せ、関所での紙料酒代や世話を拒否しようとしたり、社会的事象に対する関心や態度が示されていたり、これも興味深い。同行の三人に關しては全く記述がなく、旅行中の逸話も少ないが、仙台まで同道した秋山惣兵衛については簡潔ではあるが、記述されている。この秋山惣

兵衛は、後年の第二次測量の際に偶然にも止宿先となり、二十四年ぶりに再会した。享和元年九月八日の『測量日記』（稿末参照）には奥州旅行での二人の出会いが詳細に述べられている。その中で忠敬が自身を「旅なれぬ身」としているのも、また興味深い記述である。

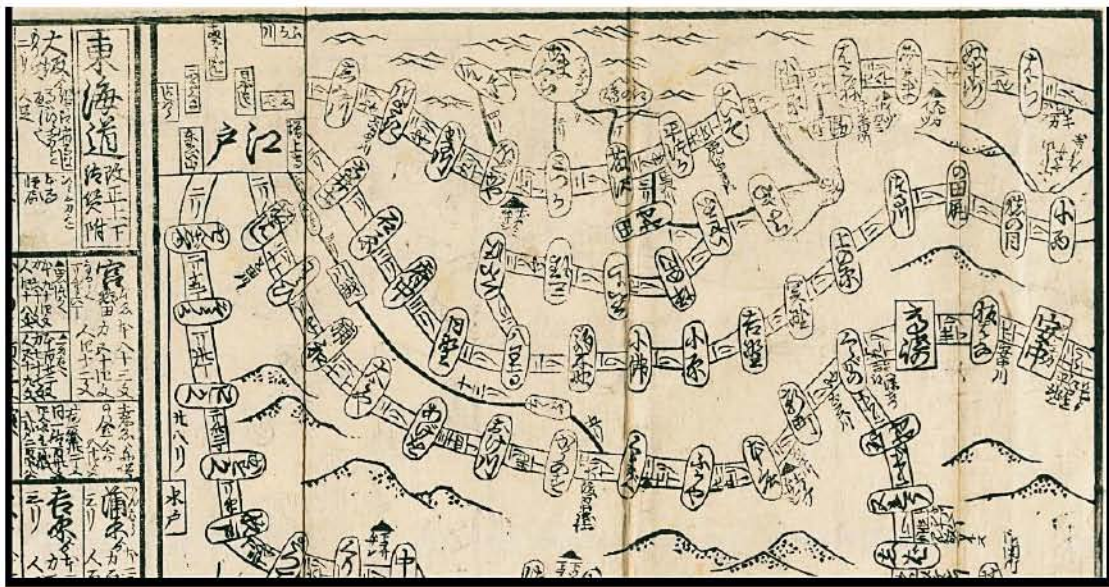
### 距離と駄賃

『奥州紀行』では各宿場間の距離と太賃（駄賃）が詳細に記録されている。一行は軽尻（本馬の半分二十貫目まで載せることができる馬）を雇っているが、駄賃からみて馬は一頭と考えられる。ミチが馬に乗り、他は徒歩で行ったのであろうか。当時、駄賃は街道ごとに相場があり、それを表示した行程表があった。『奥州紀行』でも六月十五日の条に「行程記には一里廿五丁とある」という記述がみえるので、忠敬も行程表を携行したと考えられる。下欄は東海道等の宿場間の距離と駄賃の一覧表である。東海道と比べると、奥州街道は安かったようである。距離と駄賃を綿密に記録していたところに忠敬の堅実な生活態度が表われている。

### 興味の変化

この旅行では忠敬は古跡を訪ね古歌を採録している。しかし十五年後の関西旅行の際には諸地点の方位角を計測するなど、地理学への傾斜を示すようになり、「詩歌を楽しむ文人スタイルの忠敬が十五年後には大きく変身した」と指摘される。しかし忠敬は後年の幕命による全国測量においても常に各地の神社仏閣を訪ね、古跡のある内陸までわざわざ側線をのぼし、景勝地で和歌を詠んだりしている。文人的な趣味や関心は変わらずに持ち続けながら、測量をし

ていたと考えるべきであろう。この『奥州紀行』の中にその関心の原型を見ることが出来る。



『道中獨案内圖：改正道法駄賃附』（寛政四年）

宿場名と宿場名の間は里数、左欄は駄賃

国立国会図書館蔵



# 『奥州紀行』行程略図

(日付は宿泊日)





## 奥州紀行

五月廿八日佐原出立、船ニ乗銚田へ廿九日五ッ過ニ着岸、

一、銚田方度海へ五里、軽尻太賃百三拾四文ニて参候、但銚田方もみ山へ忒り、もみ山方子生(コナジ)へ忒り、此所ニ弁天の宮有、宜普請ニ候、此節東都へ開帳ニ出申候、子生方度海へ忒り、子生の並村ニ勝瓜新田と云所有、子生と十五日代りニ馬次相勤申候、

一、度海方中の湊へ忒里、軽尻六拾五文、此間ニ大貫、磯の浜、祝町有、祝町ハ岩舟恵明院の門前の町ニて売女有、町離ニ那珂川と云大河有て、水戸枝川方流れ海へ落口也、中の湊鍵屋清五郎ニ止宿、

### 五月晦日

一、中の湊方馬渡へ忒里、軽尻五拾忒文、  
一、馬渡方村松へ一里廿八丁、軽尻四十九文、此所ニ村松の虚空蔵有、繁昌なる堂也、此村松ハ馬次ニハ無之由ニて面倒ニ有之候、併押而頼馬を為出申候、

一、村松方石上へ一里廿八町、軽尻四拾九文、折ふし打続大雨ニて衣服も濡、甚難儀ニ付、石上問屋多兵衛方ニ昼九ツ時ニ止宿、五月晦日也、

### 六月朔日

一、石上方大橋へ忒里、軽尻廿六文、此間舟渡有久慈川と申候、

一、大橋方大沼へ忒里八丁、軽尻廿七文、此間石の明神有、道の側ニ追分有て泉川へ十二丁有之候、此所水木村とて三かの原なるよし、泉川

ハ二、三間四方程ノ神水にて、見る人湧たり、と叫候へハ、中程方神水湧上るなり、上ニ天速玉姫神ノ社有、出レハ守山と云所なり、

一、大沼方下孫へ廿八町、太賃廿忒文、  
一、下孫方介川へ一里八町、同三十三文、

一、助川方田尻へ一里九町、同三十四文、  
一、介川ハ浜通ニてハ大概宜宿ニ候、

一、田尻(又神津)方愛岩へ一里卅丁、太賃四拾七文、

一、愛岩方高萩(又荒川)へ三十町、太賃廿三文、此所ニ止宿、

### 六月二日

一、荒川方足洗へ一里卅丁、太賃四拾六文、  
一、足洗方神岡へ一里卅三丁、太賃四拾九文、

此間大北川有、水戸領の境也、川末ニ磯原と申湊有、水戸諸荷物の積出し処也、但那珂川へ積入申候由、

一、神岡方関田へ一里三十丁、太賃四拾七文、  
此間浜へ廻ハ平潟の湊有、小湊ニて家作もよし、

行路切通ニて、出口ニ三ヶ所山ノ中を切通ニ致し、荷付馬を引通し、引違ニ成申候馬ニ乗申候而ハ、頭差支通兼申候、一ヶ所二十間三十間程宛の切通しにて、誠ニ穴ぜんぢやう(※穴禅定

||弘法大師が鍾乳洞の狭い穴を通り抜けておこなつた修行)と申程の事ニ候、夫方名社の関の禁へ出申候、此関も奥北要害の地ニて、牛馬

の通も難成所を後世切通ニ致し申候由、此峠常陸、奥州の境なり、

一、関田方植田へ一里、太賃廿六文、  
此間ニ大嶋、菅町と云所有、鮫川船渡なり、本

田弾正少弼領分、従是奥州岩城菊田郡也、一万

五千石、

一、植田方渡辺へ一里廿六丁、太賃四拾四文、  
此間山坂上下難所、舟尾の前ニ、湯名(長)谷

内藤因幡守陣屋有、一万五千石、

一、渡辺方舟尾へ一里十二町、太賃三拾八文、  
一、舟尾方湯本へ十六丁、舟尾と湯本十五日代

ニ馬次を相勤申候所、此節舟尾番ニて、平迄の馬ならは出し可申候へ共、湯本へ次候事ハ致し

悪、殊ニ太賃定則無之ゆへ帳合ニ致し兼候由、  
達而被申候ニ付、万一湯本にて伝馬差支候ハ、

湯本方宿ニても、問屋ニても、遣し可申旨斷置、  
帳面なしニ湯本へ行、山形や彦治ニ止宿、長雨

ニ隰ニ中候へハ、山形や湯二度々入、翌三日之  
晝迄滞留入湯致し候、出立ノ日方是迄日々の雨

ニて、大ニ致難儀候、

### 六月三日 雨少し降、

一、湯本方岩城平へ一里廿八丁、太賃四拾四文、  
平ハ安藤対馬守城下五万石、平より小名の浜へ

三里半有よし、  
一、平方四ツ倉へ二里廿八丁、太賃七拾四文、

此間ニかまだ川有、舟渡し也、人ハ小橋有て渡  
也、又飯田川橋有、四ツ倉泊、宿駿河屋新五兵

衛、湯長谷方四ツ倉迄岩崎郡なり、

### 六月四日

一、四ツ倉方久の浜へ一里、太賃廿七文、此間  
急なみ坂有、此所仙台御預所十二万石の初也、

久の浜ハ久の郡也、

一、久の浜方広野へ二里廿二丁、太賃六拾八文、  
久の浜問屋兵左衛門相応の宿ニ相見候、此間山

坂多し、末次村方あざみ村ハ磯を通り申候、



一、広野方木戸へ一里、太賃廿七文、此間二長沢、岩沢杯と云山坂有、此辺檜葉郡、  
一、木戸方富岡へ二里廿二町、太賃六拾八文、此間二木戸川舟渡し、又井出村二小川あり、富岡泊、宿岩城屋清兵衛、

六月五日

一、富岡方熊川へ一里十四丁、太賃三十七文、此間二川有、熊川入口より相馬塚也、  
一、熊川方長塚へ一里廿二町、太賃五拾五文、  
一、長塚方高野へ一里八町、太賃三拾五文、  
一、高野方小高へ二里半、太賃六拾三文、  
一、小高方原の町へ一里廿四丁、二里半なるへし、  
太賃六拾五文、此間飯田川有、橋あり、  
一、原町方鹿嶋へ一里六丁（一里廿四丁なるへし）、太賃四十四文、  
此所二鹿嶋明神有、此里の入口左側大茶屋二泊、

六月六日

一、鹿嶋方中村へ二里卅一町、太賃七拾五文、此所相馬因幡守城下五（六）万石、五月中の申二大祭礼有、小高より原の町の間二大原あり、野馬多し、此馬を家中の諸士大勢出召捕、小高の妙見へ献するよし、尤諸士野馬を召捕へ候もの二ハ、相馬侯方馬代御出し被成買上二成、則野へ御放し被成よし、此辺行方郡、武鑑二中村ハ宇田郡と有、  
一、中村方黒木へ廿八町、太賃廿七文、  
一、黒木方駒ヶ峯へ一里八町、太賃三十三文、駒ヶ峯ハ相馬、仙台の堺二而、従是仙台領なり、婦人ハ此所ニて入切手無之候而ハ、帰二出口ノ

関所六ヶ敷候、問屋と申合紙料酒代を遣し、関所方入切手を取可申候、  
一、駒ヶ峯方新地へ三十五町、太賃廿五文、駒ヶ峯ニハ仙城の関所有、婦人ノ往来を吟味致し候、此所守護宮内中務地行百五十貫文、  
一、新地方坂本へ二里、太賃五拾貳文、  
一、坂本方山下へ壹里半、太賃四拾壹文、此所二泊、

六月七日

一、山下方亘迄二里四丁、太賃五十六文、此辺亘理郡、  
一、亘方岩沼へ二里半、太賃七重拾壹文、此間二大熊川有、大河ニて舟渡しし、里人の言ニ、あぶくま川と云、岩沼より名取郡也、竹駒明神有、古跡能社なり、社方三、四丁側二二本の松有、男松女松相生のよし、当時ハ男松の方枯て、女松斗葉を生しあり、芭蕉の句ニ、桜より松は二本の三月越し、と記したる碑、竹駒の社の前二有、  
一、岩沼方増田へ一里廿九丁、太賃五拾貳文、岩沼ハ仙城本道中なり、  
一、増田方中田へ三十五町、太賃廿三文、  
一、中田方長町へ一里、太賃廿七文、名取川橋有、  
一、長町方仙城国分町へ一里十二丁、太賃三十貳文、仙城入口ニ広瀬川橋有、仙城宿国分町小幡屋太兵衛方ニ滞留、八日九日兩日也、八日ハ奥州分秋山惣兵衛と申仁と一同ニ相成、国分町迄同道致、右宗兵衛ハ肴町問屋へ参申候、此仁肴商売致し、廻船を持銚子江戸へ積入申候よし、

此度も分方江戸へ登、夫方銚子へ廻候よし、能連ニて十二、三日之しけ道中を一所に致し、相互ニ慰合申候、小幡屋も甚宜宿ニて、朝夕魚類沢山ニ給申候、食料百五拾銅ニ相極申候、

六月十日

一、国分町方塩釜へ四里半、此間名所旧跡多有之候儘、歩行ニ致し候、町離ニ釈迦堂有、したれ桜の大木おほし、余国ニ是程の大木の数をミズ、春の盛嘸と思れたり、少し行ハ宮城の野あり、萩の名所也、往古ハ城下此辺宮城野と云しと見えたり、城下方松嶋辺まで宮城の郡也、宮城野より福浦村へ出ル、此村ニ用水の川有、冠川の末也、夫より八幡村へ行、此村二八幡宮有、是則奥州の八幡八幡なり、宮城の側二国分寺あり、六十六部の納経の所なり、扱八幡村平左衛門と云ものゝ裏ニ沖の石有、八、九間四方程の泉水の中ニ自然石の岬々たる石組あり、往古此辺海中と相見へ候、里人の物語ニハ、沖の石ハ当所田畑の中ニあり、一石ニ不限すべて沖の石なるよし、歌の意ニよれハさもあるへし、同村ニ末の松山の寺有、末松山と云額有、寺の後ニ小山あり、赤松漸五、六本あり、其内ニ今ハ小杉など交りたり、此五、六本の松ハ余り年を経し様ニもミへず、甚いぶかりしに、客殿の前ニ末の松山の古哥数多書連ネ、あるまニ詠吟すれハ、中ニ俊成卿女の哥ニ、  
浪ニ移る色にや秋のまぬらん宮城の原の末の松山と云哥のあるまニ、初て古の末の松山なりし事を悟ぬ、定家卿の哥ニ、  
浪越ぬ袖と八かねておもへにき末の松山尋ね見しよ



西行法師の哥二、  
 たのめおきし其いゝことやあた二なりて浪越  
 ぬべき末の松山、  
 其外末の松山ニ題せし哥の員多けれど、行先も  
 遠けれハ、三首を書留ぬ、夫方紅葉山あべの松  
 ハしと云名所有、塩竈の側ニ野田ノ玉川有、日  
 本六玉川の一と云伝り、今ハ少しの流にて水も  
 清からず、古ハ大流ニて、水も清ルなるへし、  
 側小碑有、月うつる野田の玉川来て見れハ水かけ清  
 くすめる世の中、と云哥有、  
 一、塩竈明神へ参詣致し候、普請の結構、神社  
 二類少し、正面ニ両社有、右宮左宮と云、里人  
 の言ニハ鹿嶋香取の神なるよし、右に塩竈の社  
 有、二重の玉垣、二重の拜殿なり、町の中ニ塩  
 釜四ツあり、是則明神の初而塩たきし釜なり、  
 古ハ七ツ有之しに三ツハ海へ沈入しより、其所  
 を釜か淵云、此塩竈方船を雇可申存候所、松嶋  
 まで価七百銅と申候は、岡ヲ松嶋へ参申候、  
 道法式里半あり、明神の山を越し往還へ出、一  
 里十二丁行ハかわら焼と申所へ出申候、此所ニ  
 二、三軒茶や有、夫方松嶋へ一里六丁あり、松  
 嶋宿あふきやと申候、能宿ニ御座候、宿方富山  
 へ式里半、富山方塩竈へ五里、舟を都合七百銅  
 二雇、まづ富山の桮へ舟を着、夫方岡十八、九  
 丁行は富山也、観音堂有、此堂ハ飛弾内匠が一  
 夜ニ建し堂と、里人云伝へり、此寺の座敷方松  
 嶋并ニ大海を眺望致候へハ、八百八嶋の景一眼  
 ニ相分り、其景色筆墨の及所ニあらず、方言ニ  
 松嶋の景ハ富ニありと、誠ニゆへあるかなとか  
 んしたり、松嶋方富へ行舟中眺望の嶋々、五大  
 堂、福浦嶋、一子嶋、経の嶋、おしま、松吟庵、  
 座禅堂、朝日嶋、左に高木村、磯崎村塩焼の浜

あり、に今塩釜のゆゑんニて、塩焼かま七ツ限  
 のよし、富山方遠眺望すれハ、宮戸四ヶ浜、大  
 高森あり、大嶋にて田畑人民も之有よし、大高  
 森ハ仙城候、大海通船を改候所也と、其外大は  
 ま、むろ浜、津き浜、さと浜、さむ沢、ほうし  
 ま、のゝしま是を七嶋と云よし、石浜、かつら  
 しま、とうくう、よかさき、せうふた、松ヶ浜、  
 花ふし是も七浜と申よし、何れも漁人又ハ仙城  
 流人嶋も有之と承候、広事也、右ハ富の眺望な  
 り、夫方舟ニ乗、伊勢しま、小町しま、布袋嶋、  
 大黒嶋、きい長しま、内裏しま、甲しま、かし  
 ま、ゑぼしま、はたかしま、女御のしま、三ツ  
 の小しま、まかきしまを経て塩釜に着申候、塩  
 釜の浦の惣名の千賀の浦と称し申候、まかきし  
 まの先ニ釜か淵、并ニ古へ塩をたき候古跡有、  
 嶋々の員と云、風景と云、筆ニ尽しかたし、  
 松嶋山瑞岩寺ハ、国主よりの普請ニて、地領廿  
 四貫文のよし、座敷の結構、金襖、彫りもの言  
 ニ伸かたし、宿方案内を頼可被参候、当寺の開  
 山ハ真壁平四郎発心和尚のよし、其以前ハ天台  
 宗のよし、最明寺殿行脚の折ふし、瑞岩寺ニて  
 泊を乞候へ共、許容無之、発心和尚と同鐘楼堂  
 ニ通夜致し、最明寺殿鎌倉ニ御帰の後、天台の  
 衆徒を追放、経を焼捨焼と云、発心和尚へ此寺を  
 与られしよし、後唐僧カクマン禅師、是を瑞巖  
 寺の開山ニも致し候、又鎌倉建長寺開山大学禅  
 師も其後住宅致申候よし、雲居禅師を中興開山  
 とも称し申候、是ハ里人の言といへとも利ある  
 によりて、記し置也、塩釜へ九ツ過ニ着、大田  
 屋ニ泊、又々塩竈ノ神を拝覽致し申候、塩釜四  
 ツ町中ニ有、和泉三郎忠衡献し鉄塔有、





六月十二日

一、塩釜方国分町へ四里半、此間二壺の碑有、道二追分ありてはつか二町四十間の側なり、多賀城の古跡なり、此辺もおくの細道の内なるべし、碑銘ハ別ニ有ニより略之、岩切村ニ轟のはし、又ハとたゑのはしとも云古跡有、小橋にて誠ニ見るニ足らずと云へとも古奥海道の橋なるへし、此辺をも奥の細道と云、元の松山と云有、末の松山ニ対したる名なるへし、本の松山、末の松山共二古の海道と見へたり、本道中二冠川有、はし有、其側二十府のすげと云旧跡あり、二ヶ所也、一ヶ所ハ田の端ニあり、一ハ家の後ニあり、一二間四方程の間ニ菅あり、是も古の海道方見へたる沼ニてもありしなるべし、今市と云宿の先ニびくに坂と云有、左へ少し行ハ小蘗村ニ小づるがいけと云小池有、昔ハ大池ニて壺ありしとかや、今ハ小水ニて何もなし、夫方原町城下国分町小幡ニ泊り申候、

六月十三日

一、国分町方長町へ一里十二町、太賃三十七文、  
 一、長町方中田へ三十二丁四十間、太賃廿七文、  
 一里七  
 申候  
 一、中田方増田へ卅一町十間、太賃廿三文、  
 一、増田方岩沼へ一里卅町十六間、太賃四十七文、  
 一、岩沼方槻の木へ一里廿五町四十間、太賃四十五文、此間左ニ大熊川、右之方の山二千口松と云ふらしたる所有、其所ニ昔縁丸と云鷹の石ニ成たる石の有よし、岩沼ハ古内主殿八千石、仙城の家臣たり、  
 一、槻木方舟ノ廻一里十一丁十六間、太賃三十

三文、此間二道の左ニ船岡のたてあり、要害の宜所也、右ニ大山あり、たてと山の間ニ纒ニ三丁斗是塞ハ本道の通路なし、舟岡ニ芝田九郎治五千石、仙城の守護なり、

一、舟廻方大河原へ一里十五町廿六間、太賃三十五文、  
 一、大河原方金ヶ瀬へ三十丁、太賃廿七文、此間並木ニ漆多し、大河原迄芝田郡なり、  
 一、金ヶ瀬方刈田の宮へ一里十二丁、三十七文、  
 一、刈田宮方白石へ一里廿四丁、太賃四拾五文、此辺刈田郡なり、此所ニ泊、

六月十四日

一、白石方齊川へ一里十五丁、太賃四十五文、白石の城ハ片倉小十郎持城也、  
 一、齊川方越河へ一里十六丁、太賃四拾七文、此所仙台本道の関所あり、駒ヶ峯方入切手を取不申候間、六ヶ敷隙を取申候、尤も仙台宿方関所役人清三郎へ手紙参候へ共、先へ紙料酒代を出し不申候間、其旨を先ニても云兼、延引ニ及申候。後清三郎方世話料百銅出し可申様ニ被申候間、早速遣し申候所、同道ニて関所を通し、又貝田方八丁目へ関所切手入用のよし下書を認、すぐニ八丁目へ通切手ニ致し、貝田ニて判を貰参申候、

一、越河方貝田へ十八町、太賃十五文、下紐ノ関有、  
 一、貝田方藤田へ廿七丁(一里七丁なるへし)、太賃三拾七文、従是先伊達郡也、伊達の大木戸有、左右山ニて下ニ田と川有、此川を堰留候へハ、水漫々とたゝ候よし、左ハ国見山のけんあり、禁ニ二重堀有、能要害なり、此側ニよし



『奥州紀行』六月七日の部分 伊能忠敬記念館蔵



『奥州松島全島旧新三図附瑞巖寺図』  
 (文化七年) 国立国会図書館蔵



經(義經)の腰かけ松と云有、高尠丈式、三尺  
二すきずして、大サニ抱余、其枝葉八方ニ垂れ、  
前後左右の開凡三十間四方と云伝り、枝葉土ニ  
垂れ、本ノ行所不知程の事なり、画ニも凶し兼  
たり、高砂の松、曾禰の松と云とも及がたかる  
へし、女松なり、関外無双なるへし、大木戸前  
ニ箒松と云有道端也、右よしつねの腰かけ松方  
田畔を伝へ行ハ、弁慶の硯石有、自然石にて水  
の溜あり、硯ニ似たり、

一、藤田方桑折へ一里七丁、太賃廿五文、此太賃  
前に入邊  
なる

一、桑折方瀬の上へ一里十二町、三十六文、瀬の上  
岩層の石へ  
行連あり、  
占山口

一、瀬の上福嶋へ二里八丁、太賃五十四文、  
泊宿ハ奥山兵藏也、小家なれとも売女無之、飲  
食宜し、外ハ家々ニ売女多し、此所板倉伊三郎  
三万石の城下也、従是忍郡也、

### 六月十五日

一、福嶋方根子町(清水町とも)へ一里廿丁、  
太賃四十七文、行連配二里  
廿五丁と有、

一、清水町方八丁目へ一里半、太賃三十六文、  
一、八丁目方油井へ一里七丁(油井方二本柳へ  
七丁)、太賃三十老文、此辺安達郡也、二本松  
まで、

一、油井方二本松へ一里、太賃廿七文、  
二本松の入口油井の地内ニ八軒茶やと云有、此  
前二道の左方十町斗脇ニ安達原黒塚有、少し原  
の形残れり、けつめの石、するすみの石杯と申  
もの有之よし承候、

一、二本松方杉田へ一里四丁、太賃三拾文、城主丹  
羽加賀

守千方  
七百石

一、杉田方本宮へ一里十三丁十八間、太賃三拾  
六文、

一、本宮方高倉へ一里十一丁町、太賃三拾式文、  
杉田辺方浅香郡也、此所ニ五百川と云有、

一、高倉方福原へ一里卅五丁、太賃四拾老文、  
一、福原方郡山へ十九丁、太賃拾九文、郡山柏  
や九兵衛と所ニ泊、此家ニハ売女無之候へ共、  
外宿ハ何れ五人七人宛売女をかへ置申候、柏  
屋ニても脇方招寄申候様ニ相見へ候、本宮ニも  
売女有之候、

六月十六日

一、郡山方日出の山へ廿六丁、太賃十九文、  
一、日出の山方すか川へ二里五丁、太賃五十八  
文、

一、すか川方笠石へ一里半、太賃三十七文、  
一、笠石方新田へ一里半太賃三十七文、新田の  
前ニ矢吹と云宿有、新田と十五日代のよし、宿  
宜泊ニよし、此辺白川郡、新田迄本道中、従是  
棚倉、水戸へ分ル、

一、新田方川原田へ二里半、太賃六拾式文、  
一、川原田方堤へ二里十二町、太賃五十六文、  
一、堤方棚倉へ一里十二町、太賃三十四文、城  
主小笠原岩丸高六万石なり、宿ハ佐川式右衛門  
ニ泊申候、家ハきれいニ御座候、

六月十七日

一、棚倉方八槻へ一里、太賃三十式文、八槻ニ  
一宮近津大明神の社有、別当山伏ニ而、式百石  
領候よし、

一、八槻方台宿へ一里、太賃三十式文、  
一、台宿方伊香へ十八町、太賃十六文、

一、伊香方戸塚へ一里半、太賃四十三文、戸塚  
の並ニとうたちと云所有、其間八丁伝馬代り番  
也、

一、戸塚方下関へ一里半、太賃四十三文、此間  
ニ中の町と云有、下関と代番なり、

一、下関方徳田へ式里、太賃五十六文、徳田と  
並ニ大ぬかりと云所有、代り番なり、徳田と大  
ぬかりの間ニ奥常の堺あり、従是水戸領入口也、  
一、徳田方大中へ一里八丁、太賃四十四文、  
一、大中方川原野へ二里、太賃五十八文、此所  
ニ泊宿悪し、

六月十八日

一、川原野方和(上)淵へ一里十六町、太賃三  
十八文、

一、上淵方町屋へ一里八丁、太賃三十式文、此  
間ニ入四間へ入道有、海道方一里なり、玉簾の  
たき有、

一、町屋方太田へ式里、太賃長五拾文、  
一、太田方額田へ一里半、太賃三十九文、  
太田ハ中山備前守城あり、今ハ大膳なり、此間ニて佐  
原地行代を  
承申候、舟津の  
伝左衛門弟方

一、額田方田彦へ二里八町、太賃五十三文、  
一、田彦方枝川へ一里、太賃廿六文、  
田彦ニ岩城道の追分有、水戸方枝川、枝川方沢  
村へ二り、沢村方石上へ一り半のよし、

一、枝川方水府下町へ一里、太賃廿八文、  
下町ニ止宿、十九日滞留、御城、御靈屋、五百  
羅漢見物致し候、

六月廿日

一、水戸方長岡へ二里、太賃五十六文、



一、長岡方芹沢(上谷)へ三里、長岡の先二小  
鶴の宿あり、是方玉造へ分レ申候、あしくち紅  
葉へ出申候、紅葉と上合ハ並村也、

一、上合方芹沢新田へ二里、太賃五十八文、上  
合ハ紅葉と代り番のよし、

一、芹沢新田方玉造へ一里八丁、此所ニ泊り申  
候、馬次を尋候へハ、玉造方手賀、手賀方西蓮  
寺と村次のよし、玉造会所ニて被申候ま、牛  
堀迄三百銅ニて通し馬を雇參候、歩行ならハ宜  
候へ共、馬ニて參候ニハ玉造通水戸へハ不宜候、  
銚田上り宜候、

六月廿一日

一、玉造方牛堀へ五里、

一、牛堀方佐原へ八時半ニ着申候、但し牛堀め  
うがや方舟を立乗申候、舟賃貳百文なり、出立  
後長雨ニて路次も不宜、致難儀候へ共、乍四人  
無異ニ道中致し罷帰申候、

仙城本道中方最上羽黒山道あり、○槻木方村田  
へ三三、村田方川崎へ三三、川崎方野上へ一り  
八丁、野上方笹谷へ二り半、是をサヤ越と云、  
○大河原方村田へ二り半、川崎、野上ハ前二同  
じ○葛田宮方一り八丁永野、一り半猿花、夫方  
川崎、野上へ出申候、

仙城方最上へ出ル道を二口越と云、国分町方二  
り半あやし、二り半は、二りの志り、三り二  
口峠、二り山寺、二り天童、六田、一り四丁た  
て岡、一り九丁飯田、二り尾花沢、一り九丁柳  
沢、三り舟方、一り清水、二り相貝、四り古口、  
二り十六丁清川、三りかり川、  
松嶋方最上羽黒山へ出ルニ銀山越と云有、吉岡、  
古河、岩手山、宮村、梶沢、シト前、笹森、向

町、蟬源、新庄を通候よし、

土用まへの旅ゆへ、単もの帷衣袴ニ半分の綿入  
のミ持參ニて、道中長雨ニて度々致難儀候、仙  
城、塩釜、松嶋へ參候而も、右の衣服ニてハ凌  
かね申候、此上ハ最上象形をかけ候人あらハ、  
綿入等油断有べからず、六月中奥羽ノ山々ニハ  
雪が多相見へ候、藤田、桑折、辺ニて氷雪の売  
人出申候、珍敷事なり、

伊能三郎右衛門

安永七年

戊五月廿八日出立

杜氏

清兵衛

六月廿一日帰

利兵衛

道矩

佐原方銚田へ九里、銚田方仙城国分町迄都合七  
十二里半、軽尻太賃貳貫十六文也、但し舟尾方  
湯本の太賃を十六(五)文と積り候也、佐原迄  
八十一里半也、  
仙台方水戸下町まで都合六十七里三町、太賃壹  
貳(貫)八百五十九文也、水戸方佐原へ十五里  
八町、合八十二里十一町也、

(了)

※旅行中の宿泊先を傍線で表示した。  
※名所旧跡、目印等を太字で表示した。

【参考文献】

『伊能忠敬書状』千葉県史料 近世篇 千葉県

測量日記

第二次測量(本州東海岸)

享和元年(一八〇一) 九月八日

曇天、朝六ツ後女川浜出立(中略)七ツ頃に  
着、止宿秋山惣兵衛。此夜測量、海中に江ノ島  
あり、家八十六軒あり。仙台領の流人島のよし。  
余、先年奥州松島を遊覧しけるに、頃は臯月末  
の八日、佐原を出立、銚田という所まで乗船す。  
風波ありて尺取らず。漸々、串挽へ着て船泊り  
しける。傍にも旅人乗し舟ありける、苦越しに  
物語れば、松島より遠き分ケ浜という所の秋山  
惣兵衛という者にて、交易の事に銚子港へ来  
り。復、その国へ帰りけるなり。彼人いいける  
は、一人旅の物寂しければ、願くば同伴し賜え  
かしと乞し程に、此方も旅なれぬ身の幸と同道  
しけるに、日々駅次、止宿の事などいと懇に執  
斗いける。十日程を経て仙台の城下に着ける  
に、此所の名所など案内し、且、酒食迄も篤く  
饗応しける。別に臨て惣兵衛いいけるは、貴邦  
は吾郷を去る事百里余の山海を隔てぬれば、お  
うが難かるべし、余は交易の為に銚子港、又は  
東都へ幾度も往来す、その行路なれば、必尋ね  
問んと約して別れぬ。それより年を経ぬれど、  
互に音信をせざりしに、此度台命をこうむり、  
国々の海辺を来往しける。此国のもよりも令あ  
りて止宿の事迄もさたせられけるに、不思議  
に、此分ケ浜なる秋山惣兵衛なる者にとまり会  
ぬ。真に深き因縁にてぞありける。終夜往事を  
語り合ひ、指を屈すれば安永七戊戌の歳にて二  
十四年にぞなりける、主じも別離を惜み、此先  
の泊々二三日の間送別しける。



# 加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊

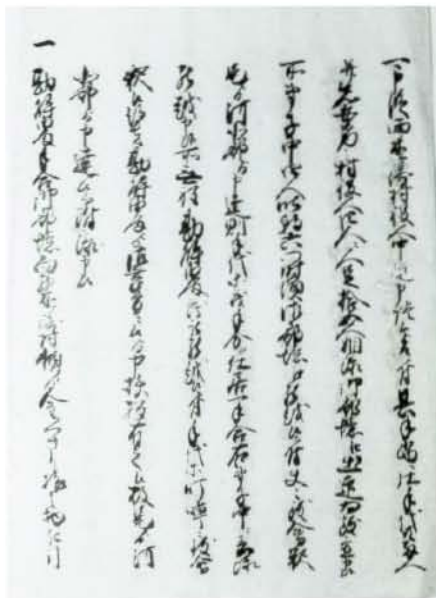
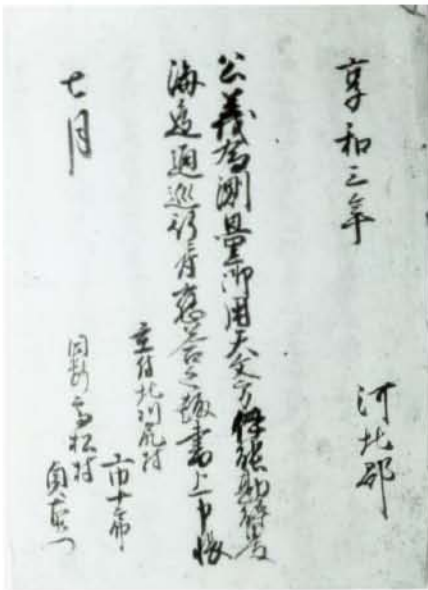
—「新田家文書」より—

河崎 倫代

はじめに

今回紹介する「公義為測量御用天文方伊能勘解由殿海辺通巡行二付応答之趣書上申帳」は、『加能史料研究 第6号』（1994年）に解説文を、『金沢学院大学附属高等学校紀要 第14号』（1997年）に口語訳文を掲載した史料である。いずれも石川県で発行された雑誌である。20年以上を経て読み直してみても、伊能忠敬没後二百年を来年にひかえた今、全国の会員諸氏に一読いただくのも一興かと思うに至った。

加賀藩領内測量は享和3年（1803）、第4次測量の時であり、まだ伊能忠敬の個人事業の性格が強かったため、第5次測量以後のような強制力もなく、測量隊への対応にはかなりのばらつきがあった。加賀藩では幕府からの通達以外に独自に情報収集をおこない、測量隊への対応策を決めた。



(表紙)

享和三年	河北郡
公義為測量御用天文方伊能勘解由殿	
海辺通巡行二付応答之趣書上申帳	
主付北川尻村	市十郎
同断高松村	
七月	貞右衛門

① 測量隊の「隠密がましき」行動への警戒心から、村高・家数、郡境・村境などの距離や道程を答えない。

② 測量御用が後々の境界論争の原因になるとへの警戒心から、測量結果を後年の証拠としない。杭を打つときは十村が立ち会おう。

③ 忠敬は「公儀召し抱え」ではない、「元百姓、浪人」であるから、藩士や十村は挨拶に出ない。「巧者な手代」に対応させる。

このような方針のもと、石川・河北郡の郡境から高松村の宿所まで丸一日案内役を務めた十村の手代たち—徳兵衛・庄七・八郎兵衛・与三助—4人の奮闘記が、この報告書のもととなっている。

この区間は現在の内灘砂丘にあたり、海岸線が単調なためか、測量方法や器具類に関する記述は少ない。手代たちの「巧者」な対応ぶりに注目して欲しい。しかしそれだけではない。「巧者な手代」に声を荒げる弟子たちと、不愉快な様子を見せることなく仮小屋での昼食に感謝する忠敬の対比も示唆に富む。行く先々でのトランプルを最小限に食い止めて、17年にわたる全国測量を達成しえたのは、忠敬のこのような人間性や処世の仕方にあつたのではないだろうか。高松宿では村役人たちに天文測量の見学を勧め、測量器具も見せている。麻田派天文学の公開性を証明する光景である。

口語訳にあたっては、原文に忠実にと心掛けたが、現代風に改めた箇所もある。例えば、「会釈」では軽い感じがするので、「挨拶」を用いた。また、文中の（ ）はすべて筆者の補足・説明である。



今からおよそ二百年前の内灘海岸で、伊能忠敬測量隊に実際にあつた出来事を、いくらかの臨場感をもつてお伝えできれば幸いである。

加賀藩十村役新田家は、羽咋郡北川尻村（現在の宝達志水町北川尻）に住し、代々十村役を勤めた家柄で、市十郎はその九代目にあたる。測量御用の翌年、文化元年（1804）、河北郡倉見村（現在の津幡町倉見）へ引越しを命じられて倉見市十郎と名乗った。現在、子孫は新田姓を名乗り、伝来文書は石川県立歴史博物館に寄託されている。

右 昼休所の荒屋村から宿所高松村まで（『伊能図大全』より）



右 荒屋村から大福寺山を望む（日本写真印刷株式会社蔵）

「測量日記」の記述

なお、「測量日記」には、この日のことが次のように記述されている。

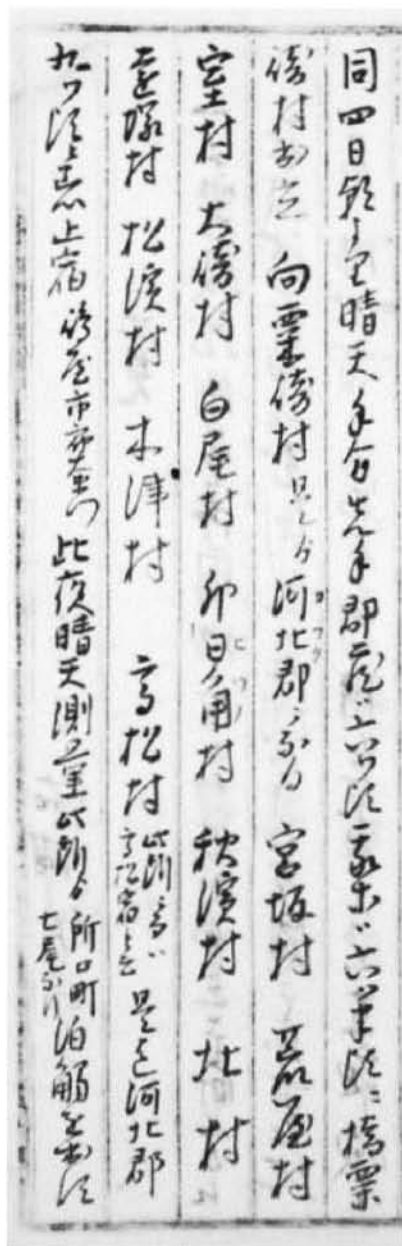
同日 朝方晴天 手分 先手郡蔵ハ六ツ頃  
我等ハ六ツ半頃二橋粟崎村出立 向粟崎村  
是方河北郡ニなる 宮坂村 荒屋村 室村

（口語訳）

同日、朝から晴天。手分けする。  
先手の郡蔵は六つ頃、我らは六つ半頃に橋粟崎村を出発し、粟崎村へ向かう。  
ここから河北郡になる。

宮坂村、荒屋村、室村、大崎村、白尾村、外日角村、秋浜村、北村、遠塚村、松浜村、木津村、高松村、ここまでが河北郡である。  
九つ頃に宿泊先の嶋屋市郎右衛門宅に着く。  
この夜は晴天で測量をする。  
ここから所口町七尾である。泊触を出す。

大崎村 白尾村 外日角村 秋浜村 北村  
遠塚村 松浜村 木津村 高松村 此所にてハ 高松宿と云  
是迄河北郡 九ツ頃二着 止宿 嶋屋市郎右衛門  
此夜晴天測量 此所方 所口町七尾 泊触を出す





一、「新田家文書」解説文

測量方御役人伊能勘解由殿、昨四日粟ヶ崎村出立、高松村海辺通致測量相越候間、宿用意有之、測量之節其村内浜通致案内候様、執斗可申旨等之先触罷、三日夕七つ時頃向粟崎村江到來二付、早速村々江申渡、猶又粟ヶ崎村江出立之時刻等聞合二遣候所、昨四日ハ二手合二仕、勘解由殿ハ朝六つ時頃出立、御郡境向粟ヶ崎村領手初二而、荒屋村領迄致測量候由、右弟子中一手合二而暁七つ時頃出立、荒屋村領手初二而高松村迄致測量可申段、粟ヶ崎村役人中迄申談候旨二付、具手当二仕、手代共兩人并先案内之村役人四人二人足拾五人相添、御郡境江出迎為致置申候所、弟子中四人昨朝六つ時頃御郡境江罷越候二付、夫々致会釈、是より河北郡与申達、則手代等茂手分ヶ仕居、一手合右弟子中二差添罷越申候所、無程勘解由殿茂被罷候二付、手代等丁寧二致会釈候得者、勘解由殿より御苦勞二候与申挨拶有之候故、是より河北郡与申達候而附添申候、

一、勘解由殿手合、御郡境向粟ヶ崎村領金くさり様之物被引懸候二付、手代より申入候者、身請申候所金くさり様之物為御引成候義ハ、今般御通筋村々郡境より郡境迄之丁間暨村々領より領江之丁間御志らへ之儀候哉、若郡中等之丁間御打立之儀二候得者、差支之趣有之難相成段申達候所、一向左様之儀二而ハ無之、今般者測量為御用致巡行候義故、測天量地与申候而、地を量而天を測申所作而已二而、勿論国郡又者村々領より領江之丁間相志らへ候等之儀二而ハ無之段被申聞候二付、測

量之儀ハ先達而公辺より被仰渡、夫々御用指支不申様相心得可申旨、重役之面々より嚴重二申渡有之候間、如何様共被仰渡之通り二相心得、御用相弁可申義二候間、領より領迄御打詰無之、所々二而測量被成候義ハ指支不申段申入候所、尤其通り与被申聞候而、則金くさりハ被引候得共、荒屋村領迄ハ磁石等を居山々方位等被見当候義ハ無御座候、

一、先立之役人ハ領付之役人二候哉、先触二申送候通り、村々領境江其領付役人罷出居申候哉与被相尋候二付、左様二而者無之、当郡中全ク右之者共御先立相勤申儀二御座候、御用之品私共江被仰聞候様二と、手代共より申達、付添歩行仕候所、本根布村・大根布村領之間二而者何之尋も無之、宮坂村黒津舟之下二而、是迄茂向粟ヶ崎村領二候哉と被相尋候二付、此辺宮坂村領二而御座候段申達候、

一、同村浦二而、向二三角形之山相見候、何と申山二候哉与被相尋候二付、大福寺山与申候段申達、此山国・郡・道程等之尋ハ無御座候、

一、同村浦二而、今日之昼所荒屋村与申者、渚より道程何程有之候哉与被相尋候二付、町間何程与申覚ハ無之候得共、余程隔り居申二付、海辺二飯り小屋を建、御昼所二拵置申段申達候、

一、右之外、村々巨細成儀尋茂無御座、勿論村々領境暨高数・家数之儀等、聊以尋被申候様成義無之候而段々付添、荒屋村領昼休所飯小屋二至り申二付、此所二而御休足被成候、御昼食可被成哉与申達候所、則被相休、中食ハ切飯・にしめ等二而、志人前之弁当箱入之俟差出申候得者、渚之小屋与申、弁当茂志人前別

二被成候与被指出候儀、甚御丁寧之至り、発足之砌より数ヶ国致巡行候得共、ヶ様之御趣向初而之儀二而感心仕杯与入念之挨拶有之、夫より駕籠二而高松駅江九つ時頃被致着候、

一、荒屋村領飯小屋二而被致昼食出立之時分、飯米代として銭式百文被払候二付、請取申候而、則請取書之儀手前帳面二書記被指出候二付、荒屋村肝煎宇右衛門名前二而印形仕申候一、弟子中四人之面々一手合二而罷越、荒屋村浜右飯小屋二而暫休足有之、此所より測量可相初旨二而、磁石を立所々方位を被定候様二候得共、山々等何之尋茂無之候、此所に式間斗之竹二紙ヲ付被相建、夫より金くさり被引懸候に付、前ヶ条勘解由殿江懸合之通、兼而示合置申儀故、夫々申達候處、甚聞請不宜、少腹立之様子二も候得共、何分領より領迄被打詰候義難相成、所々二而為測量と間数打立被申候儀ハ指支も無之与押返申入候所、成程其通り与申儀二付、段々付添歩行仕候所、先立之村役人江、領境其外渚村建通之町間等程々被相尋候得共、何レ茂存不申段相答申候所、弟子中被申聞候ハ、何を相尋候而も存知不申段申聞、元来何村之役人二候哉与被相尋候二付、私共ハ向粟ヶ崎村組合頭共二御座候故、村々領境等委義存知不申段申達候、左候ハ、是より罷帰り荒屋村肝煎差出候様被申聞候二付、右肝煎中答二ハ、私共ハ為御縮方上役より申渡二依而、郡中御先立仕儀二候間、右等之儀、出役手代江御申談被成候様二と申達候二付、右応答手代共引取、向粟ヶ崎村組合頭共此辺領境等可存様無御座、御用之品私共江被仰聞候様二と申達候所、今般之御用筋



ハ、先達而公辺より被仰渡有之筈、猶又夜前差出候先触二茂、村々内浜致案内候様申談候義致披見候哉与申聞候二付、手代共、夫等之趣急度致承知、御先触も拝見仕罷在候、併シ只今茂被仰聞候通、村々領より領を被打立間数等御志らへ之儀二而茂無之候得者、放而其村之領付之役人差出不申而者難成与申儀二而茂有之間敷、尤村切役人罷出候而者、彼是混雜仕義二付、重役之面々僉儀之上、差図を以右之者共江為主付、当郡中御先立為仕申儀二御座候間、何二而茂御尋之趣私共より可申上、右之趣二而、荒屋村二不限領付役人呼立申迄二も無御座候間、御用之品ハ私共江承り可申与申達候得者、穿而尋茂無御座候、右先立之役人ハ何之用二茂不相立儀、是より帰り候得与噂被申候得共、不承付躰二而泊り所高松村迄先立仕申候、

一、内瀉村々被相尋候二付、村名ハ申達候、道程被相尋候二付、道程ハ相知不申段申達候、一、遠塚村領浦二而、此村山陰二湖水有之由、何瀉与手代共江被相尋候二付、蓮瀉与申談申達候、是より道程何程有之哉与被相尋候二付、前々打立申儀も無御座候故、存不申と手代共相答候所、手前より被申候ハ、大抵廿丁も有之哉与被申聞候二付、左様可有之哉与請流申候、

一、夫より白尾村・内日角村・秋浜村等渚より之道程被相尋候得共、町間打立申儀も無之故存知不申段申達候所、余遠く相見江申儀二而も無之、纔々式丁か三丁斗二在之候村建之丁間二候間、大図見江渡候所二而相答可申様被申聞候得共、彼是請逃居候所、弟子中見込之

通三丁或ハ四丁も可有哉与申合候而、手帳記被申候、

一、弟子中四人之手合二而者、荒屋村領・室村領・大崎村・外日角村・木津村・高松村ハ六ヶ村領浦二而、磁石を立所々被見当候躰二、手帳二被記申候、

一、右等之次第二而、浜辺通り二而者不機嫌之躰二相見候得共、高松泊所江着之上ハ、一向相替儀無之、随分柔和二而、天文場所江茂手代共罷出見申様被申聞候二付、不殘罷出夫々道具等も見せ被申、甚首尾宜相成申候、

一、人足之儀、拾五人御郡境江指出置、測量手伝人足二被取、其跡ハ道具等持運、且又三拾五人荒屋村領屋所迄指出置、御用長持等為持運申候、馬三疋為相詰荷物附送り申候

一、勘解由殿高松泊所嶋屋市郎右衛門方へ、昨四日九つ時頃被致着、弟子中ハ半時斗も後到着二而、能州筋休泊之所之宿詰手代共江被相尋候得共、能州筋之儀ハ固達之儀故、委細存不申段申達候所、元來能州筋二而ハ手分も致候段、先達而公辺より申渡も在之儀、旁以能州筋ハ宮腰迄も聞合二罷越可申筈之所、未此所も聞合二罷越不申儀難心得候、依而今浜村役人罷越候様、飛脚を以申遣呼寄候様被申聞候、別紙面相調、飛脚指出候跡江、能州より聞合之手代兩人罷越、勘解由殿江応対仕、夫々相弁候様子二而、能州手代中ハ罷帰り申候、

一、着之上七つ時頃、天文用場所、則宿市郎右衛門背戸二而、四間四方位之間二筵為敷、板圍等も入用二無之旨二而、夫々被相拵、夜二入四つ時迄天文相濟申候、

一、米直段・金直段被相尋候二付、米壺升二付六拾貳文、金ハ六拾三匁四分与申達候、

一、宿料之儀、勘解由殿木錢三拾五文、弟子中等七人分拾七文宛二而百拾九文、飯米四升代貳百四拾八文、合四百貳文被相拵、尤請取之儀、手、前帳面二記被差出候二付、宿市郎右衛門印形仕相渡申候、

一、式朱銀一件兩替仕度旨二而被相渡候、則代錢八百拾六文相渡申候、

一、今五日朝六つ時迄念頃二挨拶在之出立被致候、

一、昨四日高松村領内へ被立置候印竹之所二而、磁石を被居、夫より又々一手合二而金くさりを引、三ヶ所二磁石を立、所々山々被見当候躰、此間二ハ何等之尋も一向無之、於御郡境手代等江懇懇二挨拶在之、能州江被移申候、

一、通筋泊所等江之内、町立候所二而ハ箱を引、丁間を知申儀有之様子二付、高松町内二而右様之儀有之候者、急度及懸合為指止可申与申談罷在之所、旅宿江被上候外町内通抜も不被致、丁間并方位等被見取候様之儀も無御座候、

右、今般為測量御用伊能勘解由殿巡行二付、於道筋等主附御所村長次郎手代徳兵衛・清見村ハ三郎手代庄七・南森下村金右衛門手代八郎兵衛・北川尻村市十郎手代与三助等応答之趣書上申候、以上、

亥七月五日  
御郡御奉行所 北川尻村 市十郎  
御改作御奉行所 高松村 貞右衛門  
森村 藤 蔵  
白尾村 理右衛門



## 二、「新田家文書」口語訳文

「測量方の御役人伊能勘解由（忠敬）殿が、七月四日粟ヶ崎村を出立し、高松村の海辺通りを測量にいらつしやるので、宿を用意し、測量の節は村内の浜通りを案内するように執りはからいなさい」との先触れが、三日の夕方七つ時頃に向栗崎村へ到来しました。早速、配下の村々へ申し渡し、なお粟ヶ崎村へ出立の時刻などを問い合わせにやつたところ、「四日は二手に分かれる。勘解由殿は朝六つ時頃出立して、郡境の向栗ヶ崎村領を手初めに、荒屋村領まで測量する。弟子たちの一手は、暁七つ時頃出立し、荒屋村領を手初めに、高松村まで測量する」と、粟ヶ崎村役人まで申し入れてきたとのことでした。そこでつぶさに手配し、手代ども二人と先案内の村役人四人に人足十五人を添えて、四日朝、郡境へ出迎えさせたところ、弟子たち四人が六つ時頃郡境へおいでになりました。それぞれに挨拶をして、「これより河北郡でございます」と申し上げ、手代どもも手分けして、一手を弟子隊に差し添えました。程なく勘解由殿もおいでになったので、手代どもが丁寧に挨拶申し上げたところ、勘解由殿よりも「御苦労さまです」との挨拶がありましたので、「これより河北郡でございます」と申し上げて、付き添いました。

一、勘解由殿の一行は、郡境の向栗ヶ崎村領より金くさりのような物（鉄鎖）を引かせて来ましたので、手代より次のように申し入れました。

「お見受けしましたところ、金くさりのような物を引いておいでですが、この度は、御通り筋の村々で郡境より郡境までの町間（距離）、および村境より村境までの町間をお調べでしょうか。もし郡内の町間をお定めになるのでしたら、差し支えることがございますので、それはお止めください。」そう申し上げましたところ、「一向にそのような事ではありません。今回は測量御用のために巡行しているのです。測天量地と申して、地を量り天を測る所作のみです。勿論、国・郡または村々の領境より領境までの町間を調べるなどという事ではありません」と申し聞かされました。なお、「測量の件につきましては、先だつて藩庁より仰せがあり、それぞれ御用に差し支えなきよう心得よと、重役の面々より嚴重に申し渡しがりましたので、如何ようとも仰せの通りに心得て御用を勤めます。領境より領境までをずっと通して測ることは成りませんが、所々で測量なさる段には差し支えはございません」と申し入れましたところ、「もつとも其の通りにいたします」とおっしゃって、金くさは引かれましたが、荒屋村領までは磁石等を据えて山々方位などをご覧になるということはありませんでした。

一、「先立ちの役人は領付きの役人ですか。先触れに申し送りました通り、村々の領境へはその領付きの役人が出ているのでしょうか」とお尋ねになったので、「左様なことではなく、当郡（河北郡）中はすべて右の者どもが先立

ちを勤めます。御用の件は私どもへ仰せ下さいますように」と手代どもより申し上げて、付き添い歩行いたしました。本根布村・大根布村領の間では何のお尋ねもなく、宮坂村黒津舟の下で「ここまでも向栗ヶ崎村領ですか」とお尋ねになったので「この辺は宮坂村領でございます」と申し上げました。

一、同村浦にて、「向うに三角形の山が見えますが、何という山ですか」とお尋ねになったので「大福寺山（高爪山）と申します。この山の国・郡・道程等のお尋ねはありませんでした。」

一、同村浦にて、「今日の昼所の荒屋村というのは、渚からどれ程の道程ですか」とお尋ねになったので、「町間（距離）はどれ程という覚えはございませんが、かなり隔っておりますので、海辺に仮小屋を建てて御昼所にこちら置きました」と申し上げました。

一、右記の外には村々の詳細についてのお尋ねもなく、勿論、村々の領境、高数、家数のことなど、いささかもお尋ねになることなく、ずっと付き添いました。荒屋村領の昼休所の仮小屋に着いたので、「ここでお休み下さい。昼食をお取りになりますか」と申し上げましたところ、お休みになりました。昼食は切飯にしめ等で、一人前の弁当箱に入れて差し出しますと、「この渚の小屋といい、弁当も一人前ずつ別々にと差し出されたことといい、



甚だご丁寧の至りです。(江戸) 出発以来、数ヶ国を巡行致しましたが、かような御趣向は初めてのことで、感心致しました」などと、入念なご挨拶があり、その後、駕籠に乗られ、高松駅へ九つ時(正午)頃到着なさいました。

一、荒屋村領の仮小屋で昼食をとり出立なさる時、飯米代として銭二百文払われたので請け取りました。請け取り書はご自分の帳面に書き記して差し出されたので、荒屋村肝煎宇右衛門の名前で印形を記しました。

一、弟子四人の面々は一団となってやってきて、荒屋村の浜辺の仮小屋でしばらく休息されました。此所より測量を始める様子で、磁石を立て所々の方位を定めているようでしたが、山々など何のお尋ねもありませんでした。此所に二間ばかりの竹に紙を付けて立て、そこから金くさりを引き懸けましたので、かねて示し合せていたことでもあり、前条で勘解由殿へ懸け合った通りに、それぞれ申し上げたところ、甚だ聞き分け悪く、少しお腹立ちの様子でした。「何分にも領より領までをずっと通して測ることはなりません。所々で測量のために間数を測られることは差し支えありません」と押し返して申し入れましたところ、「なる程その通りにしよう」と申されましたので、ずっと付き添って歩行いたしました。先立ちの村役人へ領境や渚から村までの町間などをお尋ねになりましたが、いずれも「存じません」とお答えしたところ、弟子たちは「何を尋ねても、存じませんと申すが、

元来は何村の役人なのだ」とお尋ねになつたので、「私どもは向粟ヶ崎村の組合頭でございますので、村々の領境など詳しいことは存じません」と申し上げました。「それならこれより帰って荒屋村の肝煎を差し出しなさい」と申し付けられたので、右の肝煎たちは「私どもは御縮(しまり)方として、上役よりの申し渡しによつて郡内の先立ちを勤めておりますので、右の件は出役の手代へお申し出下さい。」と申し上げたので、右の応答を手代どもが引き取つて、続けました。「向粟ヶ崎村の組合頭どもは此辺の領境など存じませんので、御用の件は私どもへ仰せ付け下さい」と申し上げたところ、「今般の御用筋については、先だつて公辺より仰せ渡されたはず。なおまた夜前に差し出した先触れにも村内の浜辺を案内致すように申し入れたのだが、見たのか」と聞かれたので、手代どもは、「それらの趣意は確かに承知し、先触れも拝見致しました。しかし、ただ今も申し上げましたように、村々の領境より領境までを測つて間数などをお調べになるということではないので、その村の領付きの村役人を差し出さなくてはならないということでもないと判断いたしました。もっとも一村限りの村役人が次々に出てきて交替するとなると、あれこれ混雑いたします。それで、重役の面々が僉義の上、右の者どもに任せて当郡内の先立ちをさせましたので、何にてもお尋ねの趣は私どもより申し上げます。右の趣意ですので、荒屋村に限らず領付きの村役人を呼び立て申すまでもございません。御用の件は

私どもが承ります」と申し上げれば、それ以上のお尋ねもありませんでした。「それならば先立ちの村役人は何の役にも立たないので、これより帰れ」などと言われましたが、聞かぬ振りをして宿泊所の高松村まで先立ちしました。

一、内潟の村々についてお尋ねになつたので、村名は申し上げました。道程を尋ねられたので、「道程は存じません。」と申し上げました。

一、遠塚村領の浦で「この村の山陰に湖水があるらしいが、何潟というのか」と、手代どもへお尋ねになつたので「蓮潟です」と申し上げました。「ここより道程はどれ程あるか」とお尋ねになつたので、「前々より測つたこともないので、存じません」と手代どもが答えたところ、ご自分より「およそ二丁もあるか」とお聞きになつたので、「それくらいでしょうか」と聞き流しておきました。

一、それより白尾村・内日角村・秋浜村などの渚からの道程を尋ねられましたが、「町間を測つたこともないので存じません」と申し上げますと、「そんなに遠くに見えるようでもなく、わずか二丁か三丁ばかりの村建の町間だから、おおよそ見えるところで答えるように」と申されましたが、あれこれ請け逃れしていると、弟子たちは「見込みの通り二丁、あるいは四丁もあるだろうか」と申し合わせて、手帳に記していました。



一、弟子たち四人の一行は、荒屋村・室村・大崎村・外日角村・木津村・高松村の計六ヶ村領の浦で、磁石を立て所々を見ている様子で、何か手帳に記していました。

一、右のような次第にて、浜辺通りでは不機嫌の様子に見えましたが、高松の宿泊所へ着くと、一向に変わった様子もなく、随分と柔和になられ、手代どもへも天文場所へ出てきて見学するように申されましたので、みな残らず出て、夫々の道具等も見せていただき、甚だ首尾よくなりました。

一、人足の件は、十五人を郡境へ差し出して置きました。測量手伝い人足に取られ、残りは道具などの持ち運びを致しました。さらに三十五人を荒屋村領の昼所まで差し出して、御用長持ちなどを持ち運ばせました。また、馬三疋を用意し、荷物を付けて送りました。

一、勘解由殿は高松の宿泊所嶋屋市郎右衛門方へ、昨日九つ時（正午）頃到着、弟子たちは半時（一時間）ばかりも後に到着しました。能州筋での休泊所の宿詰について、手代どもへお尋ねになりましたが「能州筋のことは国が違いますので、委細は存じません」と申し上げますと、「もともと、能州筋では手分（測量）も行くと、先だつて公辺より申し渡しもあり、能州筋からは宮腰までも問い合わせに来るべきなのに、まだこの所へも問い合わせに来ないのは承知できない。今浜村の村役人にすぐにやってくるように、飛脚を遣わして

呼びなさい」と申されました。そこで、別紙面をしつらえて飛脚を遣わした後へ、能州より問い合わせの手代二人が参りました。勘解由殿に對面して、いろいろ話し合った様子で、能州の手代たちは帰りました。

一、高松村に到着後、七つ時頃から、天文（観測）用の場所、即ち宿泊所市郎右衛門宅の背戸に、四間四方くらいの間に藁を敷かせ、板囲等は不用ということで、道具を設置し、夜に入って四つ時迄、天文（観測）をなさいました。

一、米の値段・金の値段をお尋ねになったので、米一升に付き六十二文、金は六十三匁四分と申し上げました。

一、宿料の件は、勘解由殿の木銭三十五文、弟子たち七人分は十七文宛で百十九文、飯米四升代として二百四十八文、合計四百二文を支払われ、請け取りは、手前の帳面に記して差し出されたので、宿市郎右衛門が印形をして渡しました。

一、二朱銀一枚両替したいと渡されたので、代錢八百十六文を渡しました。

一、今日七月五日、朝六つ時まで懇ろにご挨拶されて出立なさいました。

一、昨日、高松村領内へ立て置いた印の竹の所で磁石を据えて、そこよりまた一行が金く

さを引き、三ヶ所に磁石を立て、所々の山々を見ている様子でしたが、この間には何等のお尋ねも一向になく、郡境で手代等へ懇懃にご挨拶をして能州へお移りになりました。一、お通り筋の宿泊地などで、町立の所では箱（量程車）を引いて町間を測ることがあるというので、高松駅町内で右の様なことがあったら、きつと懸け合つて指し止めようと相談していましたが、旅宿へ上られた外は、町内を通り抜けることもせず、町間や方位等をお調べになるようなことはございませんでした。

右、今般測量御用のため伊能勘解由殿巡行に付き、道筋等での主附（責任者）である御所村長次郎の手代徳兵衛、清見村八三郎の手代庄七、南森下村金右衛門の手代八郎兵衛、北川尻村市十郎の手代与三助等より応答の趣を書き上げました。以上。

亥 七月五日	北川尻村 市十郎
御郡御奉行所	高松村 貞右衛門
御改作御奉行所	森村 藤 藏
	白尾村 理右衛門



伊能忠敬 周辺の人⑧

佐藤一斎 前田幸子



はじめに

佐藤一斎（一七七二—一八五九）は江戸後期を代表する儒学者として著名である。伊能忠敬と交際があり、忠敬の『江戸日記』にたびたび登場する。一斎は最初の伊能忠敬の伝記とも言われる墓碑銘を書き、また教育熱心だった忠敬が最愛の孫・忠誨の師として選んだ人物でもある。一斎の門下は三千人、その著書は吉田松陰、西郷隆盛にも影響を与え、現代もお読みつがれている。今回は佐藤一斎の人物像を中心に、忠敬との関係、および周辺にいた人々について紹介し、当時を考えてみたい。

家老の子

※年齢は数え年

佐藤一斎は安永元年十月二十日、江戸浜町（現・中央区日本橋）の美濃国岩村藩邸で生まれた。伊能忠敬より二十七歳年少である。一斎の父・佐藤信由は美濃岩村藩（三万石）の家老、母・留は下総国関宿藩の家老・蒔田助之進の娘だった。長男は夭折していたが、二男の一斎がまだ幼年のため婿養子が家を継いだ。一斎は岩村には五十歳のときに旅行で訪れただけで、生涯のほとんどを江戸で過ごし、江戸で没した。はじめ諱を信行、通称を幾久蔵と称したが、のち諱を坦、通称を捨蔵と改めた。号は愛日楼など。一斎は後年に称した号であるが、本稿では便宜上、すべて「一斎」と表記する。

藩主の子

浜町の岩村藩邸には藩主の子・松平乗衡がいた。後年の林述斎（一七六八—一八四一）である。松平乗蘊の三男として生まれ、一斎より四歳年長だった。諱ははじめ乗衡、のちに衡（たいら）、述斎と号した（以下、本稿では述斎と表記する）。述斎も兄二人が夭折したが、病弱のため他家から来た養子が家を継いだ。述斎と一斎は主従だったが、「兄弟のようなもの」（述斎の言葉）として相親しみ、毎日のように行き来して勉強をする学友でもあった。述斎が林大学頭となってからは、師弟ともなった。二人は七十年にわたり「形に影が添うが如き」（一斎の言葉）人生を送った。



林述斎 谷文晁画  
東京国立博物館提供

少くして学べば、則ち壯にして為すあり。  
壯にして学べば、則ち老ゆとも衰へず。  
老いて学べば、則ち死すとも朽ちず。  
【佐藤一斎『言志晩録』第六〇】  
佐藤一斎の「言志四録」（『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志壘録』）は一斎が四二歳から八二歳までの四十年余にわたって自らの思索を書き留めた語録である。一斎の深い学識と人生経験に基づいた箴言の数々は、幕末の思想家に多大な影響を与えた。西郷隆盛が「言志四録」から一〇一条を抜き書きして座右の書としたことはよく知られている。

士籍離脱

一斎は幼時から聡明で読書を好み、多芸多才で十二、三歳ですでに成人のようだったという。また拳法や柔術を習い、豪放をもって自任した。放蕩無頼の行いもあったが、十八歳で『古文孝経解意補義』を著し、十九歳で藩主の近侍となった。順調な人生が開けるはずであった。

しかし一斎が二十歳の時、ある出来事が原因で武士をやめることとなった。『岩村藩士歴世略譜』には「幾久蔵、不埒之れあり。治助（義兄・佐藤信久）より相願い、永の御暇」とある。「不埒」の内容は不詳だが、それについては、次のような逸話が伝えられている。

墨田川事件 ※現・隅田川

「ある日、一斎が同藩の友人と墨田川で舟遊びをしていたところ、友人が誤って川に落ち溺死した。一斎は独りでは藩に帰れなくなり、そのまま江戸を出走した。」（『佐藤一斎と其門人』）また、門人兼家僕だった西村尚軒の話として、「翁の若年の事として聞いたのだが、二十歳の頃、墨田川で舟遊びをしていると、三崎御崎から將軍家献上の鯉船が押し切り櫓（絶えず櫓を押し進めること）で入って来た。とっさのことで避ける暇がなく、衝突してこちらの船が沈没、同船の女子が溺死した。このことで近侍を免じられた。」（『南学史』）

前の話の「同藩の友人」というのが後の話の「同船の女子」と同一人物であるかどうかは不明だが、いずれこの舟遊びの際の事故が免職の原因だったと推察される。事件が起きたのは寛政三年八月のこと。十月に士籍を離脱した。



## 大坂遊学

武士をやめた一斎は、ほかに道もないので学者になろうと決意した。述斎の勧めにしたがつて翌寛政四年（一七九二）二月、独歩で大坂に赴き、間重富宅に寄寓して懷徳堂の中井竹山に師事した。間重富は当時三十七歳、寛政七年に改暦御用で出府する三年前のことであった。

懷徳堂は享保九年に町人の出資によって建てられた郷学校で、幕府の官許を得て大坂の学問所となっていた。漢学塾であるが、脱藩した麻田剛立（寛政四年当時五十九歳）が旧知の中井竹山を頼って身を寄せ、天文学や医学の最新知識をもたらしていた。特に竹山の弟・中井履軒は麻田流天文学に深い関心をもち、自らも天文学に関する書を著した。また、懷徳堂の門人の山片蟠桃も影響を受け、著書『夢の代』の巻頭「天文第一」で宇宙論を展開している。

中井竹山（一七三〇—一八〇四）は四代目の懷徳堂の当主であった。学識が深いことで知られ、天明八年に老中松平定信が来坂した際には召されて諮問を受けた。後日、『草茅危言』を著して定信に建言もした。一斎はこの竹山（当時六十三歳）に師事し、「日夜先生の側にいて夜半に至るまで経義を討論した。先生もその熱心さを喜んだ」（『言志晩録』別存四四）という。充実した勉学生活だったようだ。しかし、在坂四か月目の五月十六日夜半、懷徳堂は北船場・天満の大火で全焼してしまう。両親からの再々の催促もあり、一斎はやむを得ず家に戻ることに決め、六月に江戸に帰着した。結局、一斎の大坂遊学は半年にも満たない短期間で終わった。



「中井竹山肖像画」  
大阪大学懷徳堂文庫蔵

**逸話一** この大坂遊学の帰途のことでもあろうか、一斎が東海道で雲助（駕籠かき）をしていたという逸話がある。江戸に帰る途中の長崎奉行が、雲助の中に只者ではない異風を漂わせている者がいるのを見咎め、きわめて顔色が青い（一斎は「青鬼」と言われていた）ことから、「君は佐藤君であろう」と問いかけると、「そうだ」と答えて少しも恥じるところがなかったという。

**逸話二** 一斎は大坂滞在中に京都に赴いて門下三千人といわれた儒者・皆川淇園（一七三四—一八〇七）を訪ねた。その際に淇園の娘が一斎の美貌に思いを寄せ、ある夜、ひそかに書を一斎の座右に投じた。翌日一斎がそれを淇園に示したところ、淇園が驚いて娘を叱責したので、娘は井戸に身を投じて死んだという。事実かどうかは不明だが、一斎の若い時期に女性の死にかかわる逸話が二件あったことになる。



「中井履軒肖像画」  
大阪大学懷徳堂文庫蔵

## 捨蔵と改名

この大坂遊学の年、二十一歳のとき、一斎は諱を信行から坦（たいら）に、通称を幾久蔵から捨蔵に改めた。以後は儒者「佐藤捨蔵」として世に知られ、また当時の慣習で、単に「捨蔵」とも呼ばれた。ちなみに、忠敬の『江戸日記』は文化十四年五月一日をもって「捨蔵」を「一斎」に変更している。その時期、四十六歳で「一斎」の号を使い始めたと推定される。

## 林大学頭入門

江戸に戻った一斎は、翌寛政五年（一七九三）二月に林大学頭入門した。林家は林羅山（一五八三—一六五七）が徳川家康に登用されて以来、代々將軍の侍講として朱子学を講じ、聖堂の祭酒職と大学頭の官名を世襲してきた。忠敬が十七歳の時、五代目の大学頭林鳳谷（一七二一—一七七四）に入門したことは周知の通りである。一斎が入門したときの大学頭は七代目の林錦峰（一七六七—一七九三）であったが、入門わずか二か月後の四月、二十六歳の若さで病没した。錦峰には嗣子がなかったため、幕府は美濃岩村藩の公子であった述斎（当時二十六歳）に命じて林家八代目を継がせた。一斎は林錦峰に入門して湯島聖堂の学舎で暮らしていたが、述斎が大学頭になったので、そのまま述斎の門人となった。師弟となった二人は以前と同様、日夜一緒に学問に励んだという。

## 昌平坂学問所開設

寛政二年、老中松平定信は「寛政の改革」の一環として林家に「異学の禁」を通達し、朱子



学の振興をはかったが、述齋の大学頭就任以降はますます積極的に文教改革を進めた。寛政九年（一七九七）には述齋の建議により、林家の私塾だった聖堂を林家から切り離し、幕府直轄の学問所として整備拡張、昌平坂学問所（通称・昌平黌）を開設した。

昌平黌は主に旗本の子弟の教育を目的とし、通学の者もいたが、寄宿舎（定員三十名）もあって官費でまかなわれた。これとは別に書生寮（南寮・北寮）があり、ここには諸藩からの俊秀が給費生として入寮した。生徒は藩の代表としてお互い競い合ったので、優秀な人材が輩出した。寮は陪臣、浪人、庶人も受け入れた。生徒達は自治制で暮らしていたが、寄宿舎と書生寮は交渉がなかった。寄宿舎、書生寮とも定員が少なかったため、入りきれない生徒は昌平黌儒官の門人となって待機した。また林家の塾に入りきらない生徒は一斎の私塾で受け入れた。学問所は明治維新までの七十年間、官立の大学として文教センターの役割を果たした。なお湯島の聖堂建築のうち、「入徳門」は数度の火災を免れ、宝永元年（一七〇四）に建てられた忠敬入門当時のものが現在も残っている。

**林家の家塾**

林家の私塾だった聖堂が官立の学問所となったことにより、湯島の家塾は廃止となった。ただし、別の場所に移転して存続していて、文化二

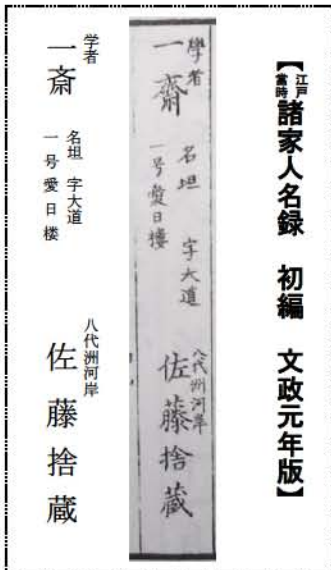


湯島聖堂の入徳門

年（一八〇五）に一斎が三十四歳で林家の塾長となった。一斎はこの時以降、七十歳で昌平黌儒官になるまで、三十六年間も塾長を務めることになる。家塾の所在地は明らかではないが、『江戸諸家人名録』は一斎の住所を「八代洲河岸」としている。八代洲河岸は林大学頭邸の所在地であり、林家の私塾はおそらく、この邸内にあったと考えられる。忠敬も『江戸日記』で常にか堀田撰津守、林大学頭、一斎方を同時に挨拶回りしている。なお堀田邸は八代洲河岸に近い大名小路にあり、松平能登守（美濃岩村藩）邸と隣接していた。

**交際のはじまり**

忠敬と一斎の交際は『江戸日記』では文化四年の年礼が最初である。尤も『江戸日記』は文化三年十一月から始まるから、それ以前のことには分からない。以降、文化六年正月まで忠敬は一斎宅に時候の挨拶回りをしている。資料がないが、息子の秀蔵（当時二十代前半）や内弟子の尾形敬助（同）が一斎に入門していたのではないかと思われる。その後、文化七年から文化十二年までの間は一斎の名は『江戸日記』にあ



<江戸城馬場先門付近>八代洲河岸と大名小路

らわれない。林大学頭や堀田撰津守へは必ず挨拶に訪れているが、一斎宅には寄りなくなる。

**太田錦城 ※大田とも**

一斎への訪問が途切れたこの期間に交際が始まったのが太田錦城である。内弟子・尾形敬助が錦城に師事していたことが書簡で知られる。この人物について、次頁に資料を掲げた。錦城は学識は深いものの新奇な学説を唱え、しかも品行がきわめて悪く博奕や盗みも行おうという、儒者としては型破りの人物だった。独自の学説を立てて人気を博し、三河吉田侯（当時の老中首座・松平信明）に招聘されて藩儒となった。文化八年頃のことだという。

その文化八年の十一月三日の『江戸日記』に、「太田才助、近藤重蔵へ立寄る」と、錦城が初めて登場する。以後、文化十三年まで、錦城宅



【太田錦城に関する逸話・資料】現代語訳・筆者

『懷宝日札』小宮山楓軒（水戸藩の儒者）

世には思いもよらないことを聞くものだ。

或る大儒（名は言わない。氏は太田）と呼ばれる人で、言うまでもなく経義に通じ、文学に達して並ぶ者がいないという。しかし講釈をするときはいつもあぐらをかき、くわえ煙管でめつたに正座などすることはなく、平常袴を着ることもない。もし袴を着るときには、前垂（前掛け、エプロン）にひだのあるものを前だけ着けて、後ろは無し。子供六人、いずれも若盛りで、父の風儀によく似て学術文章には長じているものの、行状は少しも取り柄がなく、夏は皆裸体で衣類など着ることがない。親の前でも憚らず、時には足を出して居ることもあるという。殊に甚だしいのは、一人の子は父の妾を誘い出して還らず、しかしその後、この子を許してまた同居するなど、人倫の道とも思えない。では、その儒者が窮めた経義というものは、一体いかなるものなのか。人に講義をするというのも厚かましい。あんまりで聞くに堪えないことだ。これ以外の不品行も枚挙にいとまがない程である。（中略）その人は年が五十七とか聞いたが年甲斐もない。それに、列侯に仕官している身なのに、その家法に従ったことはかつてないという。ならば儒の道をどのように心得ているのか。私のような小心者には理解しがたいことだ。この儒者はいわゆる下戸だと聞く。ならば酒のせいでもなかるうに、前述の次第は俗にいう「あきればてた」というものである。

『よしの冊子』水野為長（松平定信の部下）

太田才助と佐々木丹蔵（もと加賀の博徒。理財の才で家老に出世した）の兩人は召捕えられたという。才助は加賀者で躰壽館（多紀氏が開設した医学館）に居て講義をしながら博奕も行って、その上、去年盗みをして出奔した由。それが戻って来て又々講義に出ているとか。丹蔵も至極の悪者で以前は水戸様の御医師だったが、現在は水戸様から江戸徘徊を禁止されている。そんな者どもを儒者と申して講師に出すのは安長（幕医・多紀桂山。躰壽館教官。大田錦城を支援した）がよくよく悪いとのこと。そもそも安長は学問好きだが、とかく奇説に走り、口先が巧い者を良しとするそう。才助は去年も『疑学弁』という書を著わして朱子学を非難したとか。（中略）むやみやたらに新奇を好むのは可笑なことだという話だ。

【伊能忠敬より大川治兵衛宛書簡】

頭二郎（尾形敬助）、子年（文化元年）浪人以来、学問にだけは精を出し、余程上達しました。そのため自分でも高慢になり、未明から朝にかけて、又昼七ツ頃から夜にかけて、寸暇を惜しんで勉学にいそしんでおりますが、地図の手伝いは怠けがちで、時々病氣もしますし、先年のように精を出しません。（中略）頭二郎も昨冬薬研堀の師匠・太田へ金五兩用立て、香取へ金一兩二分、彼女へ手切金二兩二分渡し、その外に師匠へ五節句にまた小遣等やらで、余程渡し過ぎになっています。地図を仕立ててやっと思一杯だと思えます。それ以降は一文無しの学究

者になることでしよう。あなたや私の所存とは大違いです。秀蔵も学問をするほど人は悪くなります。現在（頭二郎と）同じ考えで、地図は付けたりで学問に精を出しています。この短夜に兩人とも何時に寝ているのか分からぬほどで体にも悪く、地図にもおのずと身が入らず、仕事も雑になっています。お察し下さい。

『伊能忠敬未公開書簡集』Ⅹ―Ⅰ五

【太田錦城より尾形敬助宛書簡】

毎度御手紙を下され忝く思います。さて去る冬より学業が大流行して一日も暇がなく、一向に学問することもできずに私の学問はますます荒廃しております。教授するのをやめましたら、かくの如き大流行で、さてさて困り入っております。これも天命ですから、まずは奔走しておりますが、このところの大暑で病身ゆえ大いに困っております。あなたは「壮健のこととお察しします。（中略）『鄭註孝経』（窪木清淵の著書。忠敬が序文を書いた）四冊、忝く存じ奉ります。この本はとてよく、ご考究も至つてよろしいと存じます。皆が感心して奪うように持ち去るものですから小生のところには一冊も残らず、これまた大困りです。窪木先生にくれぐれも宜しく御伝言下さい。（以下略）

六月二日

太田才助 元貞

尾形敬助様

去年の暮から錢は一銭も無いのですが、一向に困ることがなく、これまでの赤貧とは違っています。これも一大奇事ですのでお知らせします。

『房総郷土研究』第七巻第五号「名家書簡集」



と同方角だった近藤重蔵宅、秋山松之丞（奥祐筆）宅の三軒をいつも同時に回っている。忠敬が錦城の学問に賛同していたかどうかは不明だが、挨拶は欠かさない間柄だった。

#### 尾形敬助 ※謙次郎、颯二郎、他、通称多数

資料から推察すると、内弟子・尾形敬助は錦城に傾倒していたようである。自分の給料の中から錦城に五両を用立て、その外に五節句ごとに小遣いも渡していたという（忠敬書簡）。しかし錦城から敬助あての手紙は、礼状の体裁をとりながら、暗に金銭を無心するような内容になっている（錦城書簡）。忠敬は敬助が「一文無しの貧乏学究」になってしまふのではと心配し、また儒学を学んで聖人君子に近づくとどこか、逆に「学問をするほど人が悪くなる」（忠

#### 『国史大辞典』（抄）

太田錦城（一七六五—一八二五）江戸時代後期の儒学者。名は元貞、字は公幹、才佐と称し、錦城と号した。明和二年加賀国大聖寺に生まる。医者之家に生まれたが、医に甘んぜず、当時の大儒、京の皆川淇園、江戸の山本北山に就いて学んだがいずれも意に満たず、古人を師として独学刻苦した。たまたま幕府の医官、多紀桂山がその才学を認めて後援し、ようやく都下にその名を知られるに至った。学問淵博、百家の書を読破し、経術に長じ、考拠精密、みずから一家の学を建てた。吉田侯・加賀侯に仕え、文政八年六十一歳で没した。

敬書簡）と嘆いている。

尾形敬助は文化五年から文化八年まで測量行を断つて、学問に没頭していた時期があった。また、まだ幼くてわけもわからない忠誨に自分の趣味で毎晩論語の講釈を聞かせていたという逸話もある。錦城のように一家を立てて学者になりたかったのだろう。しかし、結局は学問を諦め、文化十二年に神楽坂の渡辺氏の養子に入り、普請役となった。

ちなみに、錦城の三男・太田魯三郎が文化十二年六月末に忠敬宅を訪れ、七月二日には敬助と浅草三間丁に出かけている。敬助が養子に行く直前の時期である。敬助と親しかったようだが、この三男も父に似て行状に取り柄がないと評されている。

#### 忠誨の入門

六年の空白期間を経て文化十三年十一月、一斎の名が『江戸日記』に復活する。忠敬は孫の忠誨の入門依頼で久々に一斎を訪れた。

忠敬は非常に教育熱心で、文化十二年の『江戸日記』には花形東秀と玉江文蔵という、いづれも筆道家として著名な手習師匠が忠誨の師として登場している。手習いを終え、本格的に学問させるにあたり、忠敬は一斎を選び、金五十疋を渡して翌年の入門を依頼した。

「三治郎を来月佐藤捨蔵へ預けたいと思えます。三治郎はとても私の手には余る子です。よくよく三治郎はむつかしい子で哲之助とは大違い。例え佐藤への入門で費用がかかったとしても、佐原の暮らし方を減らしてでもと、ご両人御決心下さい。これは大切なことです」

（未公開書簡集B―5）

書簡で忠敬は、「我が手に余る、むつかしき子」である忠誨の教育を、たとえお金がかかろうとも、生活費を削ってでも、という決意で忠誨を一斎に託そうとした。翌文化十四年、十二歳になった忠誨は一斎に入門し、塾内に引越した。忠敬は内入金として三百疋を納め、松平能登守様内（岩村藩家中）の又市殿という人物にも入門金として二朱を渡している。忠敬は忠誨のためにあれこれ骨を折り、お金も使った。しかし入門からわずか二か月後の六月、何か問題が起きたらしく、忠誨は塾を出て（出されて）家に引取られた。それ以降、忠敬は林大学頭へは挨拶に行っても一斎方へは行かなくなり、そのまま数か月後に亡くなった。忠敬にとつて一斎は個人的、心情的つながりというよりは、学校の教育者と生徒の保護者、という関係だったようである。

その後の話であるが、『忠誨日記』によると、忠誨は十五歳のときに一斎に再入門し、一斎を通じて林大学頭に「忠誨」という実名をいたしていた。一斎に林大学頭に入門したい旨、相談したが、年齢が不足だと断られている。以後、日記には「予、佐藤へ行く」が頻出するから、真面目に佐藤塾に通学していたようである。文政四年六月には、一斎に「七月に美濃の方へ行くので小遠鏡のよく見えるのを借りたい」と頼まれ、小目鏡を持参したという記述がみえる。時期からみて、一斎が美濃、岩村へ旅行した際の話であろう。一斎は何を見る目的だったのか、望遠鏡を携行したようである。





佐藤一斎像 (88 歳)  
石丸師曾画  
東京国立博物館提供



佐藤一斎夫妻像 (80 歳)  
椿椿山画  
東京国立博物館提供



佐藤一斎夫妻像 (71 歳)  
椿椿山画  
東京国立博物館提供



佐藤一斎像 (50 歳)  
渡辺華山画  
東京国立博物館提供

### 忠敬の墓碑文

忠敬と一斎の重要な接点の一つが墓碑文である。一斎は忠誨の依頼により、忠敬の墓碑文を執筆した。この碑文は伊能忠敬についての最初の伝記とも言われ、忠敬に関する基本的な史料の一つとなっている。その原文は『伊能東河墓碣銘』という表題で『愛日楼文集卷十九』に収められているが、これを現在源空寺に建っている墓の碑文『東河伊能君墓銘并叙』と比べてみると、かなりの異同がある。「愛日楼」所載の原文は「源空寺」碑文より長文で、かつ表現が具体的である。例えば忠敬の死因について、源空寺の碑文が「文政元年齡七十有四罹病其四月十三日劇殆不起」としているところ、「愛日楼」のほうは「罹病」を「疾疢」、すなわち熱病だったとしている。また「愛日楼」のほうには「齡踰七旬鬢霜皤然被肩而其意氣蓬勃如少壯人」(七十歳を超えてしらがの鬢が肩を覆ついても、意気盛んで若者のようだった)という文章があり、忠敬が晩年、鬢を結わずに総髪にしていたことがわかる。しかし、この文章は削除された。一斎の原文は添削・編集されて源空寺の碑文になったと考えられる。

『忠誨日記』(文政五年十二月三十日)では「碑文が出来た」という知らせが高橋景保から来ている。一斎の文章を添削できる立場にあつた人物は、忠敬を熟知し、かつ御書物奉行の地位にあつた景保以外には思い当たらない。碑文を仕上げたのは景保ではないだろうか。

なお、一斎はこの年、間重富(一八一六年没)、馬場佐十郎(一八二二年没)の墓碑文も書いている。司天台関係者三人の墓碑文が同時期に成

立したことも景保の関与によると思われるが、詳細は不明である。なお、墓碑文については稿末の資料を参照されたい。(資料一・『愛日楼全集』墓碑文)(資料二・「東岡伊能君墓」墓碑文)

### 蛮社の獄

一斎の門下からは渡辺崋山をはじめ、佐久間象山、横井小楠、山田方谷らの学者、思想家が輩出した。一斎は後世に大儒と評されるが、いくつかの批判も免れない。そのうち最も知られているのが、天保十年(一八三九)に起きた「蛮社の獄」の際に、「門弟の渡辺崋山を見殺しにした」といわれる逸話である。

実はこの事件は忠敬の門人が発端になっているので、まずそのことから紹介したい。

この事件は、鳥居耀蔵と江川太郎左衛門英龍が江戸湾測量を命じられたことから始まる。鳥居が起用した測量師がお粗末きまりなかつたので、江川が独自に別の測量師を同行した。これを鳥居側の測量師が憤り、鳥居に讒言したため大事に発展したという。この江川側の測量師というのが奥村喜三郎という伊能忠敬の門人と内田弥太郎(五観)であった。

### 奥村喜三郎

奥村喜三郎(?!?)は文化十二年(一八一五)に伊能忠敬に入門し、『江戸日記』には「奥村喜三郎来る」と計十四回、『忠誨日記』にも文政五年(一八二二)に「奥村喜三郎来たる」と二回登場している。高野長英『蛮社遭厄小記』によると、奥村は増上寺御霊屋領代官という職にあり、暦算、数学に通じていた。また、内田



弥太郎（五観）とともに経緯儀を考案し、天保九年の「尚齒会」に参加した。著書に『経緯儀用法図説』がある。「蛮社の獄」でその後も奥村は無人島を外国に売り渡す陰謀に加担したという無実の罪で弾圧をうけた。

この事件は、弾圧した側が鳥居耀藏（林述斎の子）、渋川六藏（渋川景佑の子）、弾圧された側が渡辺崋山（一斎門人）、江川太郎左衛門英龍（忠敬門人・英毅の子）と、当事者双方に一斎や忠敬の関係者がかかわっている。一斎の同僚である松崎慊堂は、水野忠邦に上書して渡辺崋山を死罪から救ったが、一斎は行動を起こさなかったとして批判される。しかし、鳥居は述斎の子であり、一斎が敵対するわけにはいかない事情があったとも言われる。

ちなみに、江川英龍の江戸湾の測量には間宮林蔵も援助したという。江川英毅と天文方とのつながりから江川家と間宮林蔵は交流があり、江川家には「蛮社の獄」や「シーボルト事件」に関する間宮林蔵の書状が三通現存しているとのことである。（資料三・『伊豆新聞』）

### 晩年と墓所

一斎は永年にわたり林家（私塾）の塾長を勤め、天保十二年（一八四一）林述斎の死去に伴って七十歳ではじめて昌平黌の儒官（幕臣）となった。將軍や諸侯に講義をしたのはこれ以後のことである。八十二歳で布衣（御目見以上）となった。その門人は三千人と言われ、門人以外にも吉田松陰、西郷隆盛らのように特に幕末維新期において著書から影響を受けた者は数多くいたと言われる。

一斎は講義上手で知られたが、晩年はぼけて、論語を講じるにも紙をめくるのを忘れて同じ箇所を幾遍もくり返し、しかしその繰り返すの一言半句も間違えないことには皆驚いたという有名な逸話がある。

安政六年（一八五九）九月二十四日夜、昌平坂の官舎で八十八歳で没し、城南麻布郷（現・港区六本木）高明山深広寺の佐藤家の墓所に葬られた。墓は一般公開されていない。

### おわりに

佐藤一斎は、現代においてもなおその著書が広く読み継がれ、特に「言志四録」は多種多様な副題つきで、数社の出版社から刊行されている。江戸時代の儒学者が現代社会に受け入れられ、活躍している稀有な例ではないだろうか。一斎の人生は「青春の蹉跎」が尾を引いて、意外にも苦勞が多かったようである。学者、思想家、教育者であったが、同時に塾長という管理職を長くつとめた。そのような人生経験から抽出されたエッセンスが一斎の思想の中に溶け込み、時代を超えて人々の共感を誘うのである。また、冒頭の『言志晩録』第六〇条に見える一斎の詩文家としての資質も、読む人を魅了してやまない理由の一つではないかと思う。

（了）

### 【参考文献】

- 『伊能忠敬 江戸日記』 伊能忠敬研究会  
 『伊能忠敬未公開書簡集』  
 『伊能忠敬日記』会報32、39号 佐久間  
 『伊能忠敬研究』第52号 安藤由紀子  
 『伊能忠敬書状 千葉県史料 近世篇』千葉県

- 『聖堂物語』『昌平黌物語』鈴木三八男斯文会  
 『佐藤一斎・大塩中斎』相良亨 岩波書店  
 『佐藤一斎と其門人』高瀬次郎 南陽堂  
 『南学史』 寺石正路 富山房  
 『補正・佐藤一斎先生年譜』田中佩刀 明治大  
 『岩村町史』『岩村藩 藩土世略譜』岩村町  
 『懷宝日札』『随筆百花苑』三卷 中央公論社  
 『よしの冊子』『随筆百花苑』八・九卷  
 『蛮社遭厄小記』高野長英  
 『懷徳堂 浪華の学問所』（財）懷徳堂記念会  
 『伊豆新聞』『江川家の至宝』平成26年5月18日、

### 余話 第八次測量出立

文化八年（一八一）十一月二十五日、忠敬は第八次測量（九州第二次）に出立した。前日、忠敬は近藤重蔵や太田錦城宅に挨拶に寄っている。彼らから励ましの言葉を受けたであろう。忠敬の全国測量は交友関係によっても支えられていたのではないだろうか。

ちなみに、出立の日、『江戸日記』には記載がないが『測量日記』を見ると間宮林蔵が見送りに来ている。この頃、忠敬は林蔵に『贈間宮倫宗序』を与えているが、その文中に「今也余職量地将赴九州（今、私は測量のため九州へ行くこととしている）」という文言がある。忠敬は実際に、今、九州へ旅立つつというこの朝に、『贈間宮倫宗序』を林蔵に渡したと思われる。日記を見るかぎり、手渡すとしたら、その機会はこの日以外にはないからである。



『伊能東河墓碣銘』原文と読み下し文

前田幸子

伊能東河墓碣銘

君、諱は忠敬、字は子齊、伊能氏、東河と号し三郎右衛門と称し、晩くには勘解由と称す。北総香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南総武射郡小堤村の神保貞恒の第三子にして出でて伊能氏を冒す。伊能氏は世、間の右族たり。大同中、諱、景能なる者あり、北総香取郡大須賀莊を知め、伊能村に居し因つて以て氏とす。子孫蟬聯（蟬声のように絶えず続く）、其地を占む。永祿中に至り、諱、景久なる者有り。始めて佐原に徙る。天正中、居民となり肆塵（商店）を開き貿易す。實に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、祖は諱、景慶、考は諱、長由、胤無く其の配神保氏は君の從祖姑なり。因つて君を以て嗣と為す。長由、蚤（つと）に歿し、産、頗る荒る。君、既に來り嗣ぐ。慨然として幹蠱（家業を継いでよく果たす）を以て志と為し、昕夕黽勉（朝晩つとめ励み）、儉素を守り、奢靡を去る。家衆百口、躬を以て率先す。産、稍々復す。天明三年、関東大いに饑う。君、為に私儲を發し閭里に賑貸（無利子の貸付）す。施し附近の村落に及び全活する所多し。六年、又、饑う。これを調（すく）うこと初めの如し。君嘗て星曆之学を好む。其の従事に肆力するを欲するや久し。家道未だ復さざる故を以て因循すること数年、寛政六年に至りて決然産を子景敬に委ね身独り都に來り僑居す。偏く曆家を訪ね疑義を挙げてこれを叩問するも竟に未だ釋然とせず。高橋君東岡に見るに及び、始めて西洋の曆法を聞く。理精しく數密かにして諸家に超越す。是に於いて宿疑渙然と氷釋し、遂に舊学を棄てこれを学び發明する所多し。東岡の門、蓋し人に乏しからずも、推歩測量の精、則ち獨り君を推すと云う。寛政十二年庚申閏四月、官、君に北陸道、及び蝦夷地方の東南の沿海を測量し以て地度を定むることを命ず。明年正月、官、君父子に銀各十錠を賜り姓と刀とを許す。天明年内に窮餓を兩救せしを賞してなり。享和元年三月、伊豆、相模、一総、常陸、陸奥の沿海を測量することを命ず。六月、又、出羽、三越、佐渡、能登、駿河、遠江、参河、尾張の沿海を測量することを命ず。文化紀元に至り地方各圖を集めて一圖と為し進呈す。其の九月、

伊能東河墓碣銘

君諱忠敬字子齊伊能氏号東河称三郎右衛門晚  
称勘解由北総香取郡佐原村人本姓神保氏南総  
武射郡小堤村神保貞恒之第三子出冒伊能氏伊  
能氏世為閩古族大同中有諱景能者知北総香取  
郡大須賀莊居伊能村因以氏為子孫蟬聯占其地  
至永祿中有諱景久者始徙佐原天正中為居氏開  
肆塵貿易居九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄  
祖諱景慶考諱長由胤亂其配神保氏君之從祖姑  
也因以君為嗣長由蚤歿君既來嗣慨然以  
幹蠱為志所夕黽勉守儉素去奢靡家衆百口以躬  
率先產稍々復天明三年関東大饑君為發私儲賑  
貸閭里施及附近村落多所全活六年又饑調之如  
初君嘗好星曆之学其欲肆力従事也久矣以家道  
未復故因循數年至寛政六年決然委産於子景敬  
身獨來都僑居編訪曆家奉疑義而叩問之竟未釋  
然及見高橋君東岡始聞西洋曆法理精數密超越  
諸家於是宿疑渙然氷釋遂棄舊学之多所發明  
東岡之門蓋不乏於人而推歩測量之精則獨推君  
云寛政十二年庚申閏四月 官命君測量北陸道  
及蝦夷地方東南沿海以定地度明年正月 官賜  
君銀各十錠 許姓刀 賞天明年内兩救窮  
餓也享和元年三月 命測量伊豆相模一總常陸  
陸奥沿海六月又 命測量出羽三越佐渡能登駿  
河遠江参河尾張沿海至文化紀元集地方各圖為  
一圖 進呈其九月 賞賜廣榮權為敬手属日官  
既而又 命測量山陽山陰西海南海四道壹岐對  
馬官道及沿海十二年又 命測量伊豆七島及箱



粟米を賞賜し擢んでて散手と為し日官に属せしむ。既にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と、老岐、対馬の官道及び沿海を測量することを命ず。十二年、又、伊豆七島、及び箱根湖を測量することを命ず。尋で江都府内を測量し、十四年四月、府内畧成り進呈す。寛政庚申より此に至る十八年を閲し、五畿七道、遐陬僻壤、地として涉らざるなく、尽く測量してこれを畧記す。後、復た命有りて寓内輿地全圖、及び度数譜、行程記を修定す。文政元年に至り、齡七十四、疾(熱病)を疾み其の四月十三日、亟(きわま)りて殆ど起たず。四年七月に至り輿地全圖及び譜記成り進呈し、其の九月四日を以て歿す。官、其の功を追賞し、孫忠誨に厚く賚(たま)い以てこれを旌せり。君、稟賦朴直にして精力人に過絶す。齡七旬を踰え、鬢霜皤然として肩を被ふも其の意氣蓬勃として少壯の人の如し。測量の命下る毎に輒ち喜び顔色に見し、不日にして歿す。乃ち躬ら險阻を歴え海濤を凌ぎ奔走すること数十百里、風雨寒暑、未だ嘗て少しも沮喪せず。噫嘻(ああ)何ぞ其の氣の豪にして事の勤なるや。著す所、國郡晝夜時刻、對數表紀源術、并用法、求割圓八線法、割圓八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、家に在りて藏す。君、先聞長由の女、繼配桑原氏、皆、先んず。三男二女を得、昆季並びて殤す。仲子景敬家を督るも又、世を蚤くす。孫忠誨承重す。墓は淺草源空寺の東岡君の塋側に在り。遺託を以てなり。君嘗て忠誨を余に従ひて遊ばしむ。忠誨、才、敏にして箕業(父祖の業)行ふに將に有望たらんとす。乃者、其の世系履歴を件繫し、余に墓門の銘を撰せんことを丐う。嗚呼余の文、豈に以て不朽の君に足らんや。然りと雖も其の請、惓々として徇わざるべからざるなり。乃ちこれを歴叙し、係るに銘四章、大書せしむるを以てし、深くこれを刻せん。其の一に曰く、天の闔(門)を叩き、地の輿を極む。瘴烟毒霧、瘡を為す能わず、祁寒暑雨、瘡を爲す能わず。乃ちかくの如き人、罕に其の儔を見る。其の二に曰く、維れ昔、夏后(禹)四陲を遍く跡み、泥に楯(そり)、山に楫(かんじき)、手に胼(まめ)、足に胝(たこ)、外にあること八年、日に孜々たらんことを思う。百世の下(後)、維れ君これに似たり。其三に曰く、表を樹て線を縦横に亘し、遠迹(近)広表を歩算す。靡或、毫舛、保障、分野、何ぞ徇にして繆せん。樞星度を定むること孔に彰にして且つ亶たり。其の四に曰く、十八年を閱すれば行數千里、一氣屹然として未だ曾て委靡せず。老いて益々壯、斃れて後已む。績、世に勒せらる。銘、悪んぞ嫉(ま)たん。文政五年壬午 嘉平月(十二月) 下浣(下旬) 江都 佐藤坦造

根湖尋測量江都府内十四年四月府内畧成 進呈自寛政庚申至此閱十八年五畿七道遐陬僻壤無地不涉尽測量而畧記之後復有 命修定寓内輿地全圖及度数譜行程記至文政元年齡七十四疾疾其四月十三日亟殆不起至四年七月輿地全圖及譜記成 進呈以其九月四日歿 官追賞其功厚賚孫忠誨以旌之君稟賦朴直精力過絶於人齡踰七旬鬢霜皤然被肩而其意氣蓬勃如少壯人每測量 命下輒喜見顔色不日而歿乃躬歷險阻凌海濤奔走數十里風雨寒暑未嘗少沮喪噫嘻何其氣之豪而事之勤也哉丹著有國郡晝夜時刻對數表紀源術并用法求割圓八線法割圓八線表紀源法地球測遠術問答凡若干卷藏在於家君先聞長由之女繼配桑原氏皆先焉得三男二女昆季並殤仲子景敬家督亦蚤世孫忠誨承重墓在淺草源空寺東岡君之塋側以遺託也君嘗俾忠誨從余游忠誨才敏箕業行將有望乃者件繫其世系履歴丐余撰墓門之銘嗚呼全文豈足以不朽君哉雖然其請惓々矣不可不徇也乃歷叙之係以銘四章俾大書而深刻之其一曰叩天之闔極地之輿瘴烟毒霧不能為瘡祁寒暑雨不能為瘡乃如之人罕見其儔其二曰維昔夏后跡遍四陲泥楯山楫乎胝足胝八年于外思日孜々百世之下維君似之其三曰樹表亘線縱橫步算遠迹廣表靡或毫舛保障分野何徇而繆樞星定度孔彰且亶其四曰閱十八年行數千里一氣屹然未曾委靡老而益壯斃而後已績勒于世銘惡乎嫉文政五年壬午嘉平月下浣江都佐藤坦造



資料二 源空寺「東河伊能先生之墓」

『東河伊能君墓銘并叙』原文と読み下し文 植田浩一

東河伊能先生之墓

東河伊能君墓銘并叙 江都 一齋佐藤坦爲文

君、諱(いみな)は忠敬、字(あざな)は子齊、伊能氏、東河と號し三郎右衛門と稱え晚(おそ)くには勘解由(かげゆ)と稱す。北總香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南總武射(むさ)郡小堤(おんづみ)村の神保貞恒の第三子にして出でて伊能氏を冒(おか)す。伊能氏は世(よよ)、閭(りよ)の右族たり。其の先は大和高市郡西田郷に出づ。大同中、諱、景能なる者あり、北總香取郡大須賀莊を知(おさ)め、伊能村に居し因つて以て氏とす。子孫蟬聯(せんれん)、其の地を占む。永祿中に至り、諱、景久なる者有り。始めて佐原に徙(うつ)る。天正中、居民となり肆塵(してん)を開き貿易す。實に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、祖は諱、景慶、考は諱、長由、長由、子無く其の配神保氏は君の從祖姑なり。因つて君に丐(こ)うて嗣と爲す。長由、不幸にも蚤(つと)に歿(ぼつ)し、産、頗る荒る。君、既に來り嗣ぐ。慨然として幹蠱(かんこ)を以て志と爲し、昕夕黽勉(きんせきびんべん)、儉素に務め、奢靡(しゃび)を禁ず。家衆百口、躬(み)を以てこれに率先す。天明三年、關東大いに饑う。君、爲に私儲(しちよ)を發し郷里を賑貸す。施し旁近の村落に及び全活する所多し。六年、又、饑う。これを救うこと初めの如し。地頭津田日州君、並びにこれを優賞す。君、星曆を好み、寛政六年に至り家事を子景敬に委(ゆだ)ね躬(み)獨り江都に來り崙(はじ)めて曆學に従事す。當時、傳うる所の曆法、君、其の合わざる所有るを疑う。徧(あまね)く曆家に就きこれを質すも猶(なお)、未(いま)だ釋然とせず。既にして官、會(たまたま)改曆の舉有り。高橋東岡なる者を召し新たに浪速より來る。君、贊(にえ)を執り往きて見(まみ)え始めて西洋の曆法を聞く。理精(くわ)しく数密(こま)かにして宿疑乃ち解け遂に舊學を棄てこれに學ぶ。推歩測量の精、東岡の門、



東河伊能君墓銘并叙 江都 一齋佐藤坦爲文  
 君諱忠敬字子齊伊能氏稱東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北總香取郡佐原村人本姓神保氏南總武射郡小堤村神保貞恒之第三子出曾伊能氏伊能氏世爲關右族其先出於大和高市郡西田郷大同中有諱景能者知北總香取郡大須賀莊居伊能村因以氏爲子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景久者始從佐原天正中爲居民開肆塵貿易實君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱昌慶考諱長由長由無子其配神保氏君之從祖姑也因丐君爲嗣長由不幸蚤歿產頗荒君與米嗣慨然以幹蠱爲志昕夕黽勉務儉素奢靡家衆百口躬率先之天明三年關東大饑君爲發私儲賑貸郷里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田日州君並びに優賞之君好星曆至寛政六年委家事於子景敬躬獨來江都崙從事曆學當時所傳曆法君疑其

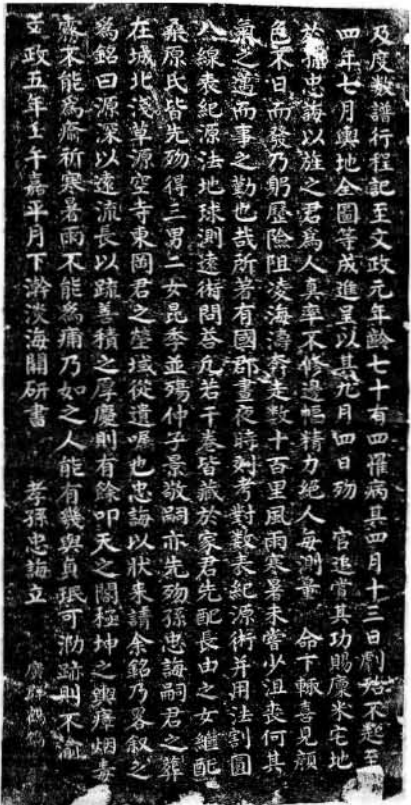
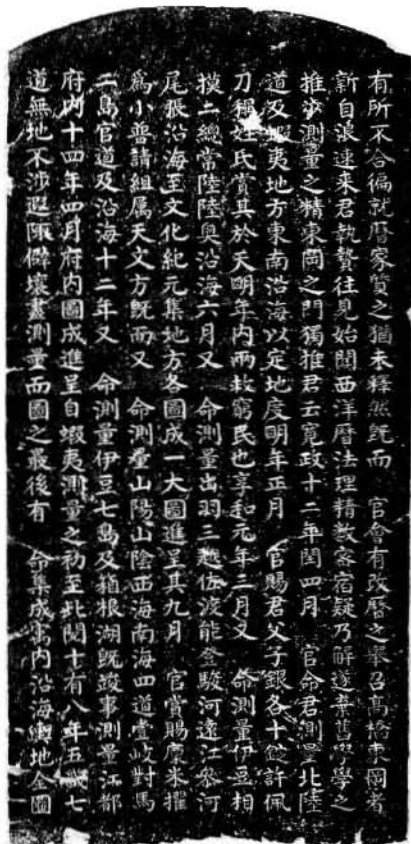


獨り君を推すと云う。寛政十二年閏四月、官、君に北陸道、及び蝦夷地方の東南の沿海を測量し以て地度を定むることを命ず。明年正月、官、君父子に銀各十錠を賜り刀を佩(お)び姓氏を稱うことを許す。其の天明年内に窮餓を兩救せしを賞してなり。享和元年三月、又、伊豆、相模、二總、常陸、陸奥の沿海を測量することを命ず。六月、又、出羽、三越、佐渡、能登、駿河、遠江、叅河、尾張の沿海を測量することを命ず。文化紀元に至り地方各圖を集めて一大圖と成し進呈す。其の九月、官、廩米を賞賜し擢(ぬき)んでて小普請組と爲し天文方に属せしむ。既にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と壹岐、對馬の二島の官道、及び沿海を測量することを命ず。十二年、又、伊豆七島、及び箱根湖を測量することを命ず。既に事を竣(お)え江都府内を測量す。十四年四月、府内圖成り進呈す。蝦夷測量の初めより此に至る十有八年を閱(けみ)し、五畿七道、地として涉(わた)らざるなく、遐陬(かすう)僻壤、盡く測量してこれを圖す。最後に命有りて寓内(うだい)い)沿海輿地全圖、及び度数譜、行程記を集成す。文政元年に至り、齡七十有四、病に罹(かか)り其の四月十三日、劇しくして殆ど起(た)たず。四年七月に至り輿地全圖等成り進呈し、其の九月四日を以て歿す。官、其の功を追賞し廩米宅地を孫忠誨に賜り以てこれを旌せり。君、ひととなり真率にして邊幅を修せず、精力絶人、測量の命下る毎に輒(すなわ)ち喜び顔色に見(あらわ)し、不日にして發す。乃ち躬(みづか)ら險阻を歴(こ)え海濤を凌ぎ奔走すること数十百里、風雨寒暑、未だ嘗て少しも沮喪せず。何ぞ其の氣の邁にして事の勤なるや。著す所、國郡晝夜時刻考、對數表紀源術、並びに用法、割圓八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、皆、家に藏す。君、先配長由の女、繼配桑原氏、皆、先に歿す。三男二女を得、昆季並びに殤(しょう)す。仲子景敬嗣ぐも亦先に歿す。孫忠誨嗣ぐ。君の葬は城北淺草源空寺の東岡君の塋域に在り。遺囑に従うなり。忠誨、状を以て來り余に銘を請う。乃ちこれを畧叙し銘と爲す。曰く、源は深く以て遠く、流れは長く以て疏(とお)る。善積の厚き、慶は則ち餘有り。天の闇を叩き、坤の輿を極む。瘴烟毒霧、瘴を爲す能わず、祈寒暑雨、痛を爲す能わず。乃ちかくの如き人、能く有らんか。貞珉(ていみん)勸(ろく)すべきも跡は則ち渝(かわ)らず。

文政五年壬午嘉平月下澁淡海關研書

孝孫忠誨立

廣群鶴鏤



※本稿は会報第四十号 植田浩一氏『忠敬墓碑銘の読み下し文』の内容を再掲したものです。



# 江川家の至宝



重文資料が語る 近代日本の夜明け

39

英毅は20(文政3)年には、日出入昼夜時刻計算書、七推日出入昼夜時刻算法(日の出日の入りから割り出した昼夜の計算書を手に入れ、24(同7)年には月食日時を計算し、「測量者」という原稿を仕上げている。

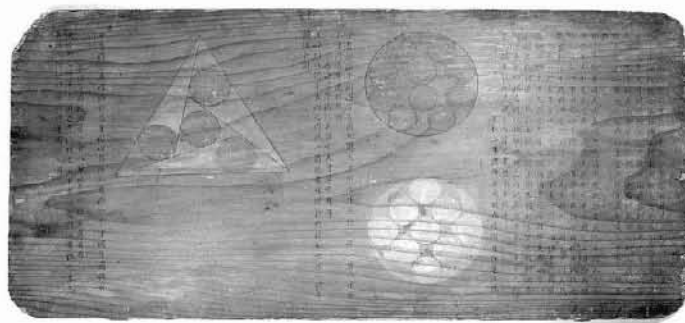
暦盤、子午線規など、天文に関する器物も多数残されている。これらには使用した、または購入した年号が記されているが、先進的で高度な趣味を持つ英毅が使用したものと思われる。

日本古来の数学である和算にも長け、余弦コサイン・三角関数等計算表なども残る。10(文化7)年には独自に「数学金谷編」を作成し、数学問題を英虎・英龍兄弟に出題させた。作問は英龍が1、3番、英虎が2、4番目を行っている。英毅は02(享和

1808(文化5)年間6月23日付「高橋作左衛門景保(江戸後期の天文学者書状に「先だつて差上げた子午線儀(南北を計る器具・江川文庫に所蔵の図面について、図解してある中で不明のところがあり、その部分を朱書きで記載してください、その通りと理解した」とあり、別に書き添え、さらに不審のことがあれば質問するように」と記載して英毅に送っている。残された書状はこれ一連であるが、内容から別紙があり、かなり詳しいやりとりが行われていたことがわかる。

## 英毅は伊能忠敬 間宮林蔵と交流

### 天文、測量、数学に造詣



英毅が神社に奉納した算額

2)年9月には神社に算額(自分の発見した数学の問題や解法を書いた絵馬)を奉納している。天文学から測量にも興味があり、伊能忠敬との交流もあつた。江川文庫には伊能からの手

紙類は残っていないが、伊能記念館で入手した伊能に宛てた英毅の手紙がある。伊能が行った全10回の測量のうち、第2次測量は01(享和元)年4月2日に江戸を出立した調

査であるが、伊豆の海岸線のみで内陸部の測量はなかった。この年はちょうど英龍が生まれた年である。第9次測量は伊能が高齢のため参加せず、永井甚左衛門を隊長として15(文化12)年

元女子の願(国元に残した家族の問題か)が決着したこと、幕府の役人で小人目付の小笠原貞蔵の番社の獄に関する誹謗の件につき調査をすることを約束している。12月17日付の書状に、「先達作左衛門一件の節に付」とあり、日本地図などをオランダ商館の医師・シーボルトに渡したとされるシーボルト事件で高橋作左衛門景保の連座(他人の犯罪事件に関係して一緒に処罰を受けること)が28(文政11)年である。

4月27日江戸を出立、三島から入り、5月2日は韭山泊で下田往還(街道)から江川邸までの十八丁道路を測量しながら、韭山代官役所を訪問している。

39(天保10)年、「蚕社の獄」で洋学者を弾圧した鳥居耀蔵との確執のなかで英龍は江戸湾の測量を行うが、その援助を、伊能に測量術を学んだ江戸後期の探検家・間宮林蔵がした。これは、英毅が天文方と交流をしていたつながりの中のことであった。

間宮林蔵からの書状が3通江川家には残っている。そのうち4月28日付では、間宮の国

元女子の願(国元に残した家族の問題か)が決着したこと、幕府の役人で小人目付の小笠原貞蔵の番社の獄に関する誹謗の件につき調査をすることを約束している。12月17日付の書状に、「先達作左衛門一件の節に付」とあり、日本地図などをオランダ商館の医師・シーボルトに渡したとされるシーボルト事件で高橋作左衛門景保の連座(他人の犯罪事件に関係して一緒に処罰を受けること)が28(文政11)年である。



## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十八回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第二次）江戸く鹿兒島 自 文化8年11月25日 至 文化9年3月29日

1			29			28			27			26			25						
文化8年12月			文化8年11月			文化8年11月			文化8年11月			文化8年11月			文化8年11月						
(1812)			(1812)			(1812)			(1812)			(1812)			(1812)						
宿泊日・旧暦			宿泊日・旧暦			宿泊日・旧暦			宿泊日・旧暦			宿泊日・旧暦			宿泊日・旧暦						
宿泊地			宿泊地			宿泊地			宿泊地			宿泊地			宿泊地						
現市町村名			現市町村名			現市町村名			現市町村名			現市町村名			現市町村名						
宿泊宅			宿泊宅			宿泊宅			宿泊宅			宿泊宅			宿泊宅						
特記・天体観測			特記・天体観測			特記・天体観測			特記・天体観測			特記・天体観測			特記・天体観測						
大図番号			大図番号			大図番号			大図番号			大図番号			大図番号						
1	1	1	29	28	27	26	25	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
(1.14)	先手中食	後手中食	(13)	昼休	(12)	先手昼休	後手昼休	(11)	昼休	小休	(10)	(9)	中食	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)			
関本村	吉田島村	神山村字清水	田原村	養毛村	大山町	子安村	伊勢原村	田村	高田村	羽鳥村字四ツ谷	藤沢宿	神奈川宿	品川宿	品川宿	藤沢宿	高田村	羽鳥村字四ツ谷	神奈川宿			
同	同	神奈川県松田町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京都品川区	同	同	同	同	同		
南足柄市	開成町	神奈川県松田町	秦野市	秦野市	伊勢原市	伊勢原市	伊勢原市	平塚市	茅ヶ崎市	藤沢市	藤沢市	神奈川県横浜市 神奈川区	神奈川県横浜市 神奈川区	相模原市	藤沢市	藤沢市	藤沢市	藤沢市	藤沢市	藤沢市	
加藤滝右衛門	名主源四郎	惣兵衛	名主儀右衛門 百姓治郎左衛門	木世満坊	成田庄太夫	庄屋弥右衛門	桐生屋孫右衛門	松屋与左衛門 葛屋甚五左衛門	庄屋武右衛門	藤屋平左衛門	吉田屋仁兵衛 平野屋甚七	上総屋長左衛門 葛屋善右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門	相模屋忠右衛門
測定	吉田島村より和田河原村小田原街道追分を歴て関本村最乗寺街道碑を過ぎ止宿前迄測る。恒星測定	神山村字清水より酒匂川を渡り吉田島村迄測る。	田原村より神山村字清水迄測る。	大山町より奥院不動堂を歴て養毛村迄測る。	子安村より大山町迄測る。恒星測定	伊勢原村より子安村迄測る。子安地蔵、子安観音あり。	田村より伊勢原村迄測る。	高田村より相模川を渡り田村迄測る。恒星測定	羽鳥村より高田村迄測る。	此日測量初なり。藤沢大鋸町より東海道・大山街道追分迄測る。	恒星測定	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	富ヶ岡八幡宮へ参詣。見送りの間宮林蔵に「贈間宮倫宗序」を手渡し、惜別の言葉とした。直に発足し、品川にて出会、合上下十九人	
九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九



9 *			8 *			7 *			6	5	4		3	2 *			宿泊日・旧暦		
支隊	支隊昼休	(22)	支隊	(21)	支隊	支隊昼休	(20)	昼休	(19)	(18)	(17)	昼休	(16)	支隊	支隊昼休	(15)	(西暦)		
上黒駒宿	上黒駒村字新宿	石和駅	勝沼駅	藤野木村	中初狩宿	大月駅	川口村	船津村	上谷村	小沼村	上吉田村	同	須走村	北久原村	竹ノ下村	小田原城下	井細田村	矢倉沢村	
同 笛吹市	同 笛吹市	同 笛吹市	同 甲州市	同 笛吹市	同 大月市	同 大月市	同 富士河口湖町	同 富士河口湖町	同 都留市	同 西桂町	山梨県富士吉田市	同	同 小山町	同 御殿場市	静岡県小山町	同 小田原市	同 小田原市	同 南足柄市	
七郎兵衛	庄右衛門	本陣彦治右衛門	本陣太兵衛	名主十左衛門	本陣藤右衛門	本陣太兵衛	社家中村備後	与五太夫	名主源兵衛	名主市右衛門	御師田辺越後	同	高村助太夫	大猿屋米山久太夫	百姓平兵衛	名主九郎左衛門 権左衛門	本陣清水彦十郎	名主与右衛門	藤屋清蔵
黒駒村境迄測る。	上黒駒村字新宿より上黒駒村下 黒駒村境迄測る。	藤野木村より上黒駒御番所を歴 て字新宿迄測る。	無測。	無測。	川口村より御坂峠を歴て藤野木 村迄測る。	無測。恒星測定	上谷村より大月駅に繋ぐ。	船津村より川口村迄測る。	上吉田村より小沼川口追分を歴 て船津村迄測る。	小沼村より上谷村迄測る。恒星 測定	甲州街道追分より小沼村迄測 る。	籠坂峠より山中村を歴て上吉田 村迄測る。恒星測定	雨天逗留、仕越を測る。須走村よ り国界籠坂峠迄測る。	北久原村より須走村迄測るが、こ の辺宝永年中富士山焼に田畑悉 亡地となる。恒星測定、富士山高 さも測る	竹ノ下村より御殿場村を歴て北 久原村迄測る。	矢倉沢村より御関所、足柄峠を 越し竹ノ下村迄測る。先手小田 原より無測。	井細田村より小田原市中宮前町 制札中柱に繋ぐ。	和天河原村追分より井細田村迄 測る。	関本村最乗寺街道碑より最乗寺 迄測る。関本村止宿前より矢倉 沢村迄測る。恒星測定
九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九九	九九	九九	九九	九九
																	特記・天体観測	大図番号	



15*		14		13		12		11*		10		宿泊日・旧暦		
【支隊】	(28)	(27)	昼休	(26)	支隊昼休	昼休	(25)	【支隊】	支隊昼休	(24)	昼休	(西暦)		
内房村字落合	完子原宿	万沢宿	富士村	南部宿	中野村	横根村	身延山	黒沢村	高田村	市川大門村	大田和村	甲府城下柳町二丁目 柳町一丁目	宿泊地	
同 富士宮市	静岡県静岡市清水区	同 南部町	同 南部町	同 南部町	同 南部町	同 身延町	山梨県身延町	同 市川三郷町	同 笛吹市	同 市川三郷町	同 中央市	同 甲府市	現・市町村名	
名主要蔵	本陣源左衛門	本陣直吉 権兵衛	長百姓源蔵	本陣近藤東左衛門 名主惣右衛門	名主喜十郎	名主清水政五郎	身延山坊中大林坊	市右衛門	名主四郎左衛門	長百姓仁左衛門	長百姓伊平治	富士井屋佐七 大坂屋太郎兵衛	宿泊宅	
橋迄測る。	万沢宿より完子原宿を歴て富士見峠迄測る。	富士村より万沢宿本陣迄測る。	万沢村興津岩淵道追分より境川を渡り完子原宿を歴て富士見峠迄測る。	南部宿より大和峠を歴て富士村迄測る。	横根村より中野村迄測る。	身延山門前より柏木峠を歴て横根村迄測る。	市川より富士川乗船、波木井村へ着。それより身延山へ行く。恒星測定	市川大門村より高田村迄測る。	高田村より富士川八間を渡り甲府韮崎追分碑に繋ぐ。高田村より富士川縁を黒沢村渡場に至り測遠の二本松に繋終る。	市川大門村より高田村迄測る。	大田和村より笛吹川渡り上野村富士大宮道追分を歴て芦川を渡り市川大門村五丁目迄測る。恒星測定	布施村追分四辻より大田和村迄測る。	無測。	上黒駒村下黒駒村境より石和宿制札迄測る。
一〇〇	一〇七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九八	九八	九八	九八	九八	九七	大図番号



27		26		25		24		23		22		21		20		19		18		17		16*		宿泊日・旧暦																					
(9)		(8)		(7)		(6)		(5)		(4)		(3)		(2)		(2.1)		(31)		(30)		支隊		(西暦)																					
水口宿		土山宿		四日市宿		桑名城下		熱田駅		岡崎城下		御油宿		吉田城下		新居宿		舞坂宿		見付宿		袋井宿		日坂宿		岡部宿		興津宿		岩淵村		支隊昼休		北松野村字可下		小嶋村字藤木		小河内村字和田							
同 甲賀市		滋賀県甲賀市		同 亀山市		同 亀山市		三重県桑名市		同 愛西市		同 津島市		同 名古屋熱田区		同 知立市		同 岡崎市		同 豊川市		愛知県豊橋市		同 湖西市		同 浜松市西区		同 磐田市		同 袋井市		同 掛川市		同 藤枝市		同 静岡市清水区		同 富士市		同 富士市		同 静岡市清水区			
脇本陣白井又右衛門		本陣堤忠左衛門		平左衛門		清水太兵衛		年寄源七		加藤五左衛門		本陣猪飼文左衛門		脇本陣太兵衛		脇本陣木綿屋太七		本陣服部専左衛門		本陣鈴木善十郎		大竹屋吉十郎		本陣疋田八郎兵衛		本陣十右衛門		脇本陣		本陣八郎左衛門		脇本陣鳥居権右衛門		脇本陣甚之丞		本陣手塚重右衛門		岩淵八郎左衛門		名主平十郎		組頭九郎左衛門		名主定右衛門	
無測。		無測。		無測。		無測。末永村山中忠左衛門へ坂部と立寄。		無測。五明より乗船。		無測。		無測。		無測。		無測。藤川宿、弥名寺へ立寄。		無測。		無測。		無測。		無測。間道を行、天竜川を渡る。		無測。舞坂宿より乗船。		無測。		無測。掛川宿より江戸へ書状を出す。袋井宿、昨夜五島侯止宿。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。			
一一九		一一九		一一九		一一九		一一八		一一八		一一五		一一五		一一五		一一六		一一六		一一一		一一一		一一一		一〇七		一〇七		一〇一		一〇〇		一〇七		一〇七							
																							特記・天体観測		大図番号																				



1		0		9	8	7	6	5	4	3	2	1	文化9年1月	宿泊日・旧暦																	
(23)		中食	(22)	中食	(21)	中食	(20)	昼休	(19)	原村片嶋駅	正条駅	姫路城下福中町	(18)	加古川駅寺家町	西谷新村	昼休	(17)	明石大倉谷宿	中食	(15)	兵庫津旅籠町	舞子浜	中食	(14)	西宮町	昆陽宿	郡山宿	(2, 13)	(1812)		
矢掛駅		川辺駅	板倉宿	岡山城下下ノ町	一日市駅	伊部村	三ツ石駅	三ツ石駅	原村片嶋駅	正条駅	姫路城下福中町	加古川駅寺家町	西谷新村	明石大倉谷宿	兵庫津旅籠町	舞子浜	中食	中食	二ツ茶屋村	西宮町	昆陽宿	郡山宿	郡山宿	芥川宿	伏見町京町	大津宿	草津宿	六地藏村柿木	(西暦)		
同 矢掛町		同 倉敷市	同 岡山市北区	同 岡山市北区	同 岡山市東区	同 備前市	岡山県備前市	同 たつの市	同 たつの市	同 姫路市	同 加古川市	同 加古川市	同 明石市	同 神戸市兵庫区	同 神戸市垂水区	同 神戸市中央区	同 西宮市	兵庫県伊丹市	大阪府茨木市	同 茨木市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	同 高槻市	現・市町村名	
平田屋平助		松田屋滝三郎	本陣難波惣七	本陣東方平四郎	福岡屋吉郎兵衛	難波三郎太夫	木村長十郎	本陣鈴木又太郎	本陣山本半右衛門	本陣井口市兵衛	井上庄兵衛	脇本陣京塚長兵衛	市右衛門	本陣広瀬治兵衛	本陣衣笠又兵衛	本陣嘉右衛門	木屋新兵衛	木屋藤左衛門分家	脇本陣小畑源兵衛	本陣吉左衛門	脇本陣又兵衛	仁右衛門	脇本陣又兵衛	脇本陣又兵衛	脇本陣又兵衛	脇本陣又兵衛	脇本陣又兵衛	脇本陣又兵衛	和中断	宿泊宅	
無測。		無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	特記・天体観測
一五一		一五一	一五一	一五一	一四五	一四五	一四五	一四一	一四一	一四一	一四一	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三六	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	大図番号	
													越年逗留、新春を賀す。																		



24		23		22		21		20		19		18		17		16		15		14		13		12		宿泊日・旧暦				
(7)		(6)		(5)		(4)		(3)		(2)		(3.1)		(2.9)		(2.8)		(2.7)		(2.6)		(2.5)		(2.4)		中食	(西暦)			
小月駅		舟木駅		山中駅		宮市駅		徳山町		今市駅		関戸駅		廿日市駅		海田市駅		四日市宿		沼田本郷駅		尾道町		今津駅		高屋駅		宿泊地		
同 下関市		同 宇部市		同 山口市		同 防府市		同 周南市		同 周南市		同 岩国市		同 廿日市市		同 海田市		同 東広島市		同 三原市		同 尾道市		同 福山市		同 井原市		現・市町村名		
黒鉄屋長兵衛		藤屋六兵衛		島屋仁左衛門		本陣三原助市郎		客館 亭主分田中武兵衛		源兵衛 伝左衛門		新屋半左衛門		本陣山田治右衛門		野村葉右衛門		砂畑伝三郎		川口源右衛門		本陣笠岡屋作右衛門		本陣菅沼武十郎		吉谷屋喜七郎		宿泊宅		
無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		特記・天体観測		
一七七		一七六		一七六		一七五		一七五		一七三		一七三		一六七		一六七		一六四		一六四		一五七		一五七		一五七		大図番号		
		昼休		中食		昼休		中食				中食		中食		中食		中食		中食		(2.5)		中食						
		吉田駅		山中駅		宮市駅		徳山町		今市駅		関戸駅		廿日市駅		海田市駅		四日市宿		沼田本郷駅		尾道町		今津駅		高屋駅				
		同 下関市		同 宇部市		同 防府市		同 周南市		同 周南市		同 岩国市		同 廿日市市		同 海田市		同 東広島市		同 三原市		同 尾道市		同 福山市		同 井原市				
		夷屋和助外一軒		本陣三原助市郎		本陣板付十左衛門		客館 亭主分田中武兵衛		源兵衛 伝左衛門		新屋半左衛門		本陣山田治右衛門		野村葉右衛門		砂畑伝三郎		川口源右衛門		本陣笠岡屋作右衛門		本陣菅沼武十郎		吉谷屋喜七郎				
		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		無測。		
		一七七		一七六		一七六		一七五		一七三		一七三		一六七		一六七		一六四		一六四		一五七		一五七		一五七				



3		2			1	文化9年2月
(15)	先手昼休	後手中食	(14)	先手中食	後手中食	(1812)
内野宿	長尾村	飯塚宿	字堀川口枝小竹	鶴田村字尾勝	木屋瀬駅	
同	同	同	同	同	福岡県 北九州市八幡西区	
飯塚市	飯塚市	飯塚市	小竹町	宮若市		
小倉屋佐助	源一郎	中野屋弥助	本陣善兵衛 小四郎 善右衛門	又五郎	本陣甚平 長崎屋弥平治	
長尾村を歴て内野宿まで測る。	壽命村新茶屋より内野川を渡り 長尾村を歴て内野宿まで測る。	飯塚川板橋より瀬戸村字瀬戸鼻 秋月追分を歴て壽命村新茶屋ま で測る。	飯塚川板橋より瀬戸村字瀬戸鼻 欄干に繋ぐ。恒星測定	勝野村字鶴池より枝小竹を歴て 飯塚宿止宿まで測り、飯塚川板橋 欄干に繋ぐ。恒星測定	赤間追分より直方川を渡り直方 を過ぎ鶴田村字尾勝を歴て勝野 村字鶴池まで測る。	雨天逗留
一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八六	

29		28	27		26	25		宿泊日・旧暦
(12)	先手中食	後手中食	(11)	中食	(9)	(8)	中食	(西暦)
木屋瀬駅	香月村 字上石坂立場	同	黒崎駅田町	荒生田村	同	小倉城下	赤間関	宿泊地
同	同	同	同	同	同	福岡県 北九州市小倉北区	同	現・市町村名
北九州市八幡西区	北九州市八幡西区	北九州市八幡西区	北九州市八幡西区	北九州市八幡東区	同		下関市	
本陣甚平	藤太郎	銀杏屋定市	同	名主与市	同	宮崎良介	新屋治郎兵衛	宿泊宅
長崎屋弥平治	小嶺村より香月村字上石坂を歴 て石坂川を渡り木屋瀬駅止宿前 を過ぎ赤間道追分まで測る。	黒崎駅田町より上津役村小嶺村 界まで測る。	雨天逗留。	小倉城下室町制札より荒生田村 を歴て黒崎駅田町迄測る。	同所逗留。恒星測定	恒星測定 二日認め御用状届く 赤間関より乗船三里。旧冬二十 二日認め御用状届く	無測。	特記・天体観測
一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一七八	一七八	一七八	大図番号



8 *			7			6		5		4		宿泊日・旧暦
支隊	(20)	後手中食	(19)	先手小休	後手中食	(18)	後手中食	(17)	後手中食	(16)	先手昼休	(西暦)
原町宿	瀬高町	尾嶋村	羽犬塚宿		一条村枝盛徳村	府中町(久留米)	古賀茶屋	松崎宿	干潟村	山家宿	山家村枝浦ノ下	宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	現・市町村名
みやま市	みやま市	筑後市	筑後市	筑後市	筑後市	久留米市	久留米市	小郡市	小郡市	筑紫野市	筑紫野市	宿泊宅
松屋喜兵衛	本陣竹次郎 喜三右衛門	庄屋与三郎	本陣中尾屋利兵衛 大津屋佐兵衛 山口屋利右衛門	塩屋治兵衛	造酒屋喜多屋文蔵	本陣万屋佐七 小松屋清蔵 福島屋常八	助蔵	本陣新八 甚兵衛 源作	庄屋伝五郎	久留米屋平右衛門 山田茂右衛門 本陣近藤弥右衛門	又五郎	特記・天体観測
一向宗松林山西乗寺												久留米領今寺村より瀬高町を歴て瀬高川を渡り、三池街道追分を経て原町宿出口まで測る。
一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八七	一八七	一八七	一八七	大図番号
			藤田村字相川より盛徳村を経て羽犬塚駅まで測る。		久留米街道四辻より矢取町柳川街道追分を歴て藤田浦村藤田村境字相川まで測る。	筑後川測遠術にて測り府中町豊後街道追分に繋ぎ止宿前を過ぎ久留米街道四辻を歴て高良山玉垂宮本社前まで測る。	松崎駅より古賀茶屋久留米追分を歴て神代村字渡筑後川渡場まで測る。		肥前筑後追分より長崎街道福岡街道碑に繋ぎ、中牟田村枝石櫃日田街道追分を歴て西小田村福岡領、乙隈村久留米領国界まで測る。	上西山字茶屋原より枝浦ノ下を歴て山家駅を過ぎ肥前筑後追分まで測る。恒星測定		







27*		26*		25*		24*		23*		22*		21*		20*		19				18				宿泊日・旧暦						
(8)		(7)		(6)		(5)		(4)		(3)		(2)		(4, 1)		(3, 1)		後手中食		(3, 0)		後手中食		(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
南榎原村 (大口駅)		目丸村字小河内		同		久木野村		湯浦本村枝古田		湯浦本村		佐敷町		田浦村浜村町 小田浦 字下小田浦		日奈久町		豊原村枝平山		岡中村		宮原町		小川町						
同 大口市		鹿兒島県大口市		同		同 水俣市		同 芦北町		同 芦北町		同 芦北町		同 芦北町		熊本県八代市		同 八代市		同 八代市		同 永川町		同 宇城市						
百姓政吉 喜八		番所宅		同		大庄屋伊藤勝太郎		庄屋孫吉		大庄屋伊藤丑助		本陣三輪屋定吉		阿蘇宮		客館 飯亭主田浦熊之助		高田手永大庄屋 小田藤衛門		宮山和二郎		種山手永大庄屋 遠山嘉左衛門		稗方吉兵衛						
恒星測定		久木野村より肥後・薩摩国界を越え字小河内まで測。		打続雨天、道路悪に付逗留。恒星測定		枝古田より久木野村迄測る。		枝大河内川端より枝古田迄測る。		佐敷村字井上、薩摩街道人吉街道追分碑より水俣大口追分を経て湯浦本村を過ぎ枝大河内川端迄測る。		田浦村浜村町より小田浦字下小田浦を経て佐敷太郎峠を越し佐敷町止宿前迄測る。恒星測定		田浦村浜村町より小田浦字下小田浦を経て二見村枝若松を経て日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝若松迄測る。		宮地村より萩原村を経て球磨川を渡り、豊原村、奈良木村、枝平山を経て日奈久町迄測る。		宮地村より下片野河村(宮地村)を経て横手村地に繋ぐ。無測にて八代。球磨川端千檀渡口より球磨川測遠術、豊原村を経て奈良木村迄測る		小川町吉本村川界中央より宮原町を経て岡中村止宿入口迄測る。恒星測定		松橋亀屋町より小川町を経て益城郡八代郡界字小川土橋中心迄測る。								
二〇八		二〇八		二〇八		二〇〇		二〇〇		二〇〇		二〇〇		二〇〇		二〇〇		一九五		一九五		一九五		一九五						



26	25	24	23	22	21	2月20日	支隊	3	2*	3月1日*	30*	29*	28*	宿泊日・旧暦				
(7)	(6)	(5)	中食	(4)	(3)	(2)	(4, 1)	(14)	(13)	(4, 12)	(11)	中食	小休	(9)	昼休	(西曆)		
阿久根町	野田村	鯖淵村米ノ津浦	鯖淵村切通	袋村	陣内村新町	津奈木村	佐敷町	鹿兒島城下 下町呉服町	脇元村	段土村(加治木)	中ノ村横川駅	高田村字黒葛川	南浦村字長池	湯尾村	前目村	宿泊地		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	現・市町村名	
阿久根市	出水市	出水市	出水市	水俣市	水俣市	津奈木町	鹿兒島県芦北町	鹿兒島市	始良町	加治木町	霧島市	霧島市	霧島市	菱刈町	菱刈町	同	同	
町人川南源兵衛 町人手洗作左衛門	郷土吉富亀治郎 吉満善助	善六 喜左衛門	野間ヶ原番所 郷土堺田喜兵衛	城山伝之丞 牧幸右衛門	水俣吉左衛門	庄屋伊藤喜仙太	三輪屋定吉	会所	百姓与市 会所家主七左衛門	瀬尾矢兵衛 有馬七兵衛	銀四郎 喜三治	百姓松右衛門	百姓源兵衛	只右衛門 長助	百姓喜左衛門	同	同	宿泊宅
野田村より阿久根町まで測。	米ノ津浦町より広瀬川板橋を渡り高尾野村を歴て野田村まで測。	淵村米ノ津浦まで測。	袋村より肥後・薩摩国界を歴て鯖淵村米ノ津浦まで測。	陣内村石橋より陣坂峠を歴て袋村まで測。	字上原より陣内村新町を歴て石橋まで測。	湯ノ浦本村より津奈木太郎峠を越、津奈木村字上原まで測	二見村字大平より赤松太郎峠を越、田ノ浦村まで測。	国界より吉野村まで測。	段土村より加久藤街道に繋、網懸橋、木田村上別府川(測遠)、脇元村綿瀬川を渡り字浦町四辻を歴て白金峠(大隅・薩摩国界)まで測	無測。恒星測定	定	川まで測。江戸用状届く。恒星測定	雨天逗留。	歴て湯尾村まで測	南榎原村より目丸村字大口を歴て薩摩・大隅国界を越、前目村を歴て湯尾村まで測	特記・天体観測	同	
二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇九	二〇九	二〇九	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	大図番号	



本隊		文化9年3月		1812		宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号		
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	3月1日	30	29	28	27					
(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(13)	(4.12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(8)					
同	同	鹿児島湊	同	同	同	同	同	鹿児島城下 下町呉服町	鹿児島城下 下町呉服町	湊村湊町	串木野村 字芹ヶ野	同	同	同	同	同	同	同	同	
同	同	同 鹿児島市	同	同	同	同	同	鹿児島県鹿児島市	鹿児島市	同 いちき串木野市	同 いちき串木野市	同	同	同	同	同	同	同	同	
同	同	船中泊	同	同	同	同	同	会所	会所	久八 十右衛門	百姓幸左衛門 武平治	同	客館	名主勇右衛門	庄八 孫太郎	松太郎				
雨天船逗留。	雨天船逗留。	鹿児島城下乗船。山川湊へ行とす。南風、船中逗留。船数八艘、三艘御用方乗船並荷物積船共、五艘屋久島種子島測量差添役並人歩、総勢九十三名	屋久島行荷物積立	野村迄測。恒星測定	下町呉服町より中町網屋町四辻へ繫、琉球舎前新橋より柳町城下出口木戸を歴て太鼓橋を渡り吉野村迄測。恒星測定	逗留。恒星測定	逗留。恒星測定	逗留。	無測量。	串木野村芹ヶ野より湊村湊町止宿まで繫測。	大小路村川内川前より川内川(測遠術)を渡り東手村、西手村を歴て串木野村芹ヶ野まで測る。	雨天逗留。大小路町より新田八幡宮迄測。	麦浦村西方より下之村滝川土橋を渡り大小路町川内川前まで測。	り麦浦村西方まで測。	阿久根町より阿久根川板橋を渡					
		二〇九						二〇九	二〇九	二二〇	二二〇	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八				



宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
29	(10)	同	同	同	同	同	安房村測所より字長江まで測	一一四
28	(9)	同	同	同	同	同	測量支度にて逗留。恒星測定	
27	(8)	○屋久島	鹿児島県屋久島町	同	同	善藏 善治郎 幸八	山川湊出船、安房村川湊へ着	一一四
26	(7)	山川湊	同	同	指宿市	同	此夜明朝出帆可成と舟手より申	一一一
25	(6)	同	同	同	同	同	雨天逗留。	
24	(5)	同	同	同	同	同	南風、同所逗留。	
23	(4)	同	同	同	同	同	南風、同所逗留。	
22	(3)	同	同	同	同	同	北風になり出船し、佐多岬沖迄乗	
21	(2)	同	同	同	同	同	出が逆風になり山川湊へ引帰す。	
20	(5.1)	同	同	同	同	同	雨天逗留。小西風になる。	
19	(3.0)	同	同	同	同	同	七ツ半頃大地震	
18	(2.9)	同	同	同	同	同	雨天南風、同所逗留。	
17	(2.8)	同	同	同	同	同	南風、同所逗留。	
16	(2.7)	同	同	同	同	同	南風、同所逗留。	
15	(2.6)	同	同	同	同	同	南風、同所逗留。	
14	(2.5)	山川湊	同	同	同	助市 庄左衛門	山川湊へ入り、上陸	一一一
13	(2.4)	山川湊入口	同	同	指宿市	船中泊	山川湊へ向て出帆。	一一一



## 忠敬が宿とした盛田久左衛門家

柏木 隆雄

常滑と聞いたとき、濃褐色の急須を想い浮べた。常滑は焼物の町という印象を持つ。夏のある日、忠敬の史跡を追って愛知県知多半島の常滑市を訪ねた。



盛田本家

忠敬の東海地方の測量は第四次。享和三年（一八〇三）二月、測量隊は江戸を発って東海道を西へ向った。豊橋から渥美半島に入り、伊良湖岬まで行ってまた豊橋に戻り、知多半島には蒲郡を経て、いまの地名では、刈谷、半田、武豊と進み、四月二九日に常滑（小鈴ヶ谷村）

に着いた。  
測量日記の部分

四月二九日朝晴天。六ツ半後東端村出立、（此日午中より暑強し。慶助病氣快方にて出勤す）

—略—

岡を通れば小鈴ヶ谷前に広目村あり。郡蔵、大兄、良助等は九ツ後、我等慶助、秀蔵は八ツ頃に小鈴ヶ谷村に着。（止宿酒造人にて盛田久左衛門）此夜曇天不測。 —略—

盛田家は代々、小鈴ヶ谷村の庄屋をつとめ、酒、味噌、醤油を商いとす醸造家で、忠敬は日記に、盛田久左衛門は酒造人なりと記していることは、佐原の三郎右衛門家と同業だったことに親しみを覚えたにちがいない。

盛田家は代々の当主が久左衛門の名跡を継いでいる。尾張藩の記録によると、寛文五年（一六六五）には酒造りをしていたようで、伊能測量隊の宿泊当時は、第九代久左衛門命親が当主であった。庄屋として小鈴ヶ谷村の諸行事に關与し、天保の飢きんの時には村民救済に私財を提供、また海岸道路の整備、築堤などにも多大な貢献をしていた。家歴の中で特記されているのは、第十一代当主の命祺が、明治政府の教育方針を理解し、私塾の鈴溪義塾を創設し多くの優秀な人材を世に出したこと。トヨタ自動車社長石田退三もその一人。時を経て昭和期、戦後まもなく第十五代当主となったのが、ソニーの創業者の盛田昭夫であった。

現在の盛田家の右奥に醸造工場、左隣に白壁土蔵造りの鈴溪資料館。ここには盛田昭夫が、

鈴溪学術財団を設立し、学術研究のための資料を収集し整理した盛田家の古文書類も保管さ



鈴溪資料館

れている。私も案内され中に入ったが、三層の棚に箱入れされた厩大な資料に圧倒された。

忠敬宿泊時の記録があるかと興味を抱いたが個々に調べる時間もなく、財団が編集刊行した盛田家文書目録上下二巻（合わせて四七〇ページ）を拝領し後日の精査とした。

文書目録には、法令、村役、治安、災害、貢租、諸役などの項目があり、法令の項には御触書留、願書留、高札などがあり、暦年順に表題、年月日が記されている。

その一例、「御公儀御触状留」宝永二年九月朔日。

測量日記には盛田家宿泊の前日に「小鈴ヶ谷村迄、泊触れを出す」と記されているが、しか



し残念なことに伊能測量隊に関するものは文書の中からは何も見つけられなかった。ただ不審に思ったことは、寛政、享和の古文書が、法令以外の行事、村役、冠婚葬祭等の項を追っても極端に少なかつた。この期の一梱包分の資料が紛失したのかとの疑念を抱いた。

盛田家訪問の機会を得たのは、伊能忠敬の導きに依る、と書くと、なぜということになるので、いきさつを説明しておこう。

ある旅行者主催のコンサートでエヴェレスト最高峰登頂の三浦雄一郎氏とお目にかかった際、私の名刺に日本地図が刷りこんであつたことから、三浦氏には伊能忠敬と少々関りがあることを話すと、三浦氏は忠敬の生涯に深く興味を持ち尊敬する人の一人であると仰言つた。これがご縁となつてこの五月に、神田駿河台の文化サロンで、エヴェレスト登頂写真展の開催となつた。その時の司会の中で私が三浦氏との出会いのいきさつを話すと、終演後、来場者の女性が「私の実家に伊能忠敬が泊つた」と話されたので「えっ、ご実家は何処ですか」と尋ねると、「愛知県常滑です」驚いたことに、その女性は岡田直子さん、あのソニーの創業者、盛田昭夫のご長女であつた。忠敬とソニーの盛田さん、この巡



盛田家文書目録

り合せて胸が躍つた。帰宅後、さつそく測量日記で検証しそれが事実であることを確認した。その後、岡田さんから、お調べになることがあれば、常滑の本家と鈴浜資料館をご案内下さるとのありがたいお便りをいただき、七月十三日、岡田さんの常滑行のご予定に合わせて盛田家訪問となつたのである。岡田さんは東京世田谷にお住いであるが常滑の盛田家に係りのある事業にも関係し、また盛田昭夫アーカイブ写真展のプロデュースもなさっている。月に一度は東京と常滑を往來しておられた。



「盛田昭夫写真展」入口にて  
筆者（左）と岡田直子さん（右）

常滑市の観光名所の「味の館」も盛田株式会社経営で、道の駅のようなレストランを兼ねた盛田家醸造品の販売所。おいしい味噌田楽とおそばをご馳走になつた。この味の館に付属して盛田昭夫アーカイブ写真展が開催されてい

た。「ソニーの盛田」「世界の盛田」が躍動する資料がセンスよく展示されていた。盛田家を訪ねた日はお盆の入り、第十六代当主の盛田英夫氏も在宅されていて、忠敬が寝食をしたかも知れない客間で、同席されていた菩提寺のご住職と共に、しばし忠敬談議となつた。

暑い盛り、車にて各所をご案内いただいた岡



盛田家第 16 代当主英夫氏（後列右）と  
岡田直子さん（前列右）

田直子さんに心から感謝の気持を申し上げ、盛田本家訪問記を了とする。

〈参考資料〉

測量日記

伊能忠敬測量隊の史跡をたどる

佐久間達夫 編著  
井上辰男 編著



兵庫県篠山市  
「伊能忠敬笹山領測量の道」標柱12基マップ

伊能忠敬笹山領探索の会  
資料・構成/加賀尾宏一 徳平利加子

篠山市で平成27年に設置された4基は、本誌第79号で紹介しましたが、引き続き昨年10月から翌1月に8基が建立されましたので、これら約62km間に及ぶ標柱12基の設置概要について、それらの写真・説明文を伊能大図(丹波国多紀郡笹山領)の上に、**[1]**から**[12]**順に表示しました。

① 名称/石柱「伊能忠敬笹山領測量の道」  
② 碑文/正面「伊能忠敬笹山領測量の道」  
後面「平成28年(2016)11月建 篠山城下まちづくり協議会 伊能忠敬笹山領探索の会」  
③ 設置場所/篠山市北新町47番地2  
④ 設置年月日は碑文の後面と同じ  
⑤ 設置者は碑文の後面と同じ  
⑥ 設置の背景・経緯  
平成28年度は、市内8地区のまちづくり協議会と7小学校(6年生234名)が、当会の提案したイベント「ふるさと再発見、歴史街道に学ぶ」に賛同・協力  
⑦ 見学の可否/随時可能  
⑧ 標柱の仕様/白御影石 四角柱の幅は各16cm 高さ90cm



北緯35° 4' 32" 東経135° 13' 1"

② 設置場所/篠山市西岡屋字柳ノ坪甲3番の1  
④ 設置年月日/平成29年(2017)1月建  
⑤ 設置者/岡野ふるさとづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 4' 34" 東経135° 12' 15"

③ 設置場所/篠山市西谷字宇治谷ノ坪295番  
④ 設置年月日/平成28年(2016)10月建  
⑤ 設置者/西紀南まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 5' 26" 東経135° 11' 3"

③ 設置場所/篠山市追入字堂ヶ谷坪500番  
④ 設置年月日/平成27年(2015)10月建  
⑤ 設置者/大山郷づくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 6' 51" 東経135° 7' 14"

③ 設置場所/篠山市上板井字平城ノ坪283番  
④ 設置年月日/平成27年(2015)10月建  
⑤ 設置者/西紀中地区里づくり振興会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 6' 5" 東経135° 10' 17"

③ 設置場所/篠山市大沢1丁目18番地15  
④ 設置年月日/平成28年(2016)11月建  
⑤ 設置者/味間地区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 3' 26" 東経135° 10' 29"

③ 設置場所/篠山市福住342番地  
④ 設置年月日/平成29年(2017)1月建  
⑤ 設置者/福住地区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 4' 16" 東経135° 20' 38"

③ 設置場所/篠山市日置136番地  
④ 設置年月日/平成27年(2015)10月建  
⑤ 設置者/日置地区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 4' 8" 東経135° 16' 46"

③ 設置場所/篠山市櫛ヶ坪甲83番地1  
④ 設置年月日/平成29年(2017)1月建  
⑤ 設置者/八上校区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 4' 5" 東経135° 14' 10"

③ 設置場所/篠山市宇土字入口165番  
④ 設置年月日/平成28年(2016)12月建  
⑤ 設置者/城南地区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 3' 42" 東経135° 11' 35"



平成29年1月19日、除幕式に参列した多紀小学校6年生とたき幼稚園の児童たち(元福住小学校正門前)

伊能大図の測線と測量日記  
伊能大図第127号福知山の部分/第136号篠山・三田の部分(アメリカ議会図書館蔵)に大日本沿海実測録(伊能忠敬記念館蔵)による天体観測点と伊能忠敬測量日記(佐久間達夫校訂編)に記載されている内容を表示する。  
なお測量日記にある○印杭(入クヲカ北山丹サ寺ニ水住)は、測量の基点となる追分(分岐点)に打込まれた地点を示す。また○印杭は、測量の基点となっているが、○印の文字が記載されていないところを示す。



標柱のGPS測量による緯度、経度成果は、(一般社団法人)兵庫県測量設計業協会丹波支部のご厚意による。

③ 設置場所/篠山市今田町今田1番地3  
④ 設置年月日/平成28年(2016)11月建  
⑤ 設置者/今田まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯35° 0' 25" 東経135° 6' 45"

③ 設置場所/篠山市草野字瓜ノ下282番  
④ 設置年月日/平成27年(2015)10月建  
⑤ 設置者/古市地区まちづくり協議会  
伊能忠敬笹山領探索の会



北緯34° 59' 46" 東経135° 9' 12"



## 測量日記にみる一日の測量（八王子）

菱山 剛秀

伊能忠敬の測量日記によれば、文化六年の秋に江戸を出発し、二年越し九州の第一次測量の帰路、伊能忠敬の測量隊は、現在の岡崎市から長野県の伊那市に抜け、甲州街道に出て、測量をしながら江戸に向かった。文化八年（1811）四月二十三日に甲府に着き、同五月四日に相模と武蔵の国境の小仏峠を越えて、小仏駅に着いた。

そして、五月五日、伊能忠敬の測量隊は、本体が甲州街道を小仏駅から八王子宿まで測量し、支隊は高尾山を測量し八王子宿の東よりにあった横山宿の名主川口七郎兵衛宅に宿泊している。測量は早朝から始められ、昼にはこの日の宿泊地に着いている。



小仏の関所跡

江戸に向かう甲州街道の西の入口に当たり、重要な関所であり、千人同心が守っていた。



測量日記の高尾山細道と思われる尾根道

地元の住民が使っている形跡はあるが、ほとんど知られていない山道である。

高尾山へは小仏関所の西側の新井村から登っているが、現在はこの付近に登山道は存在しない。しかし、同時代に描かれた武蔵名所図絵の小仏関所の絵には関所の西側から高尾山の登山道が描かれているから、当時は甲州街道から高尾山に詣でる人の登山口があったのであろう。

旧暦の五月五日は、現在の六月二十四日にあたり、夏至の時期で日は長いが梅雨の季節でもある。一旦宿に着いた一行は、雨が近づいているのを察してか宿泊場所からさらに先の宿場の出口まで測量している。やがて雨も降りだしたようだが、測量日記にはその後の行動の記載がない。

おそらく明るいうちにこの日の測量結果を下図に整理するとともに、宿の主から地名や知行所などの情報を聞くなど、測量地の情報を収集・整理していたと思われる。この夜は雨だったので外の観測はできなかったが、晴れていれば夜も天体観測をしていたはずである。



甲州街道に設置された道標

甲州街道と裏街道のあんげ道（陣馬街道）の追分であり、「左甲州道中高尾山道」と彫られている。



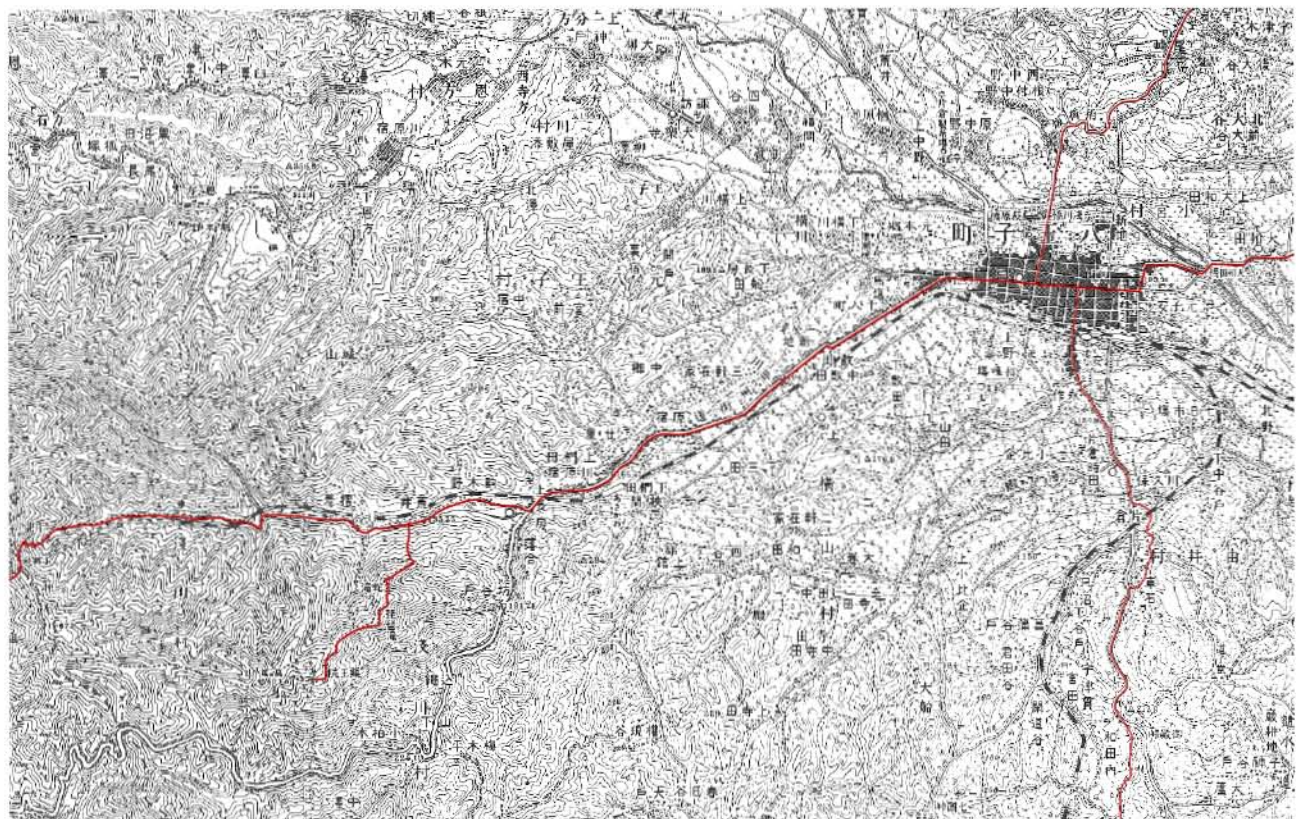
今も残る旧甲州街道（上栢田村原宿）

旧街道沿いには古い家並が残り、道の脇の水路には今も豊かな水が流れている。





国立国会図書館蔵 伊能大図第90号 (八王子部分)



5万分の1地形図「青梅、八王子、五日市、上野原」 (明治39年～42年 陸地測量部)



伊能忠敬測量日記 文化八年五月五日（西曆一八一二年六月二十五日）

同五日曇天 先後手六ツ後 小佛駅出立 後手我等 下河邊 青木 永井 長蔵

武州多摩郡 伊奈助右衛門 御代官所 上長房村同小佛宿方初 制札迄 一丁二十七間 字摺差

高尾山細道 上長房村内 駒木野 宇新井 高尾山追分 印迄測 駒木野驛

制札迄 △二十四丁二十七間 御關所 曰小仏 御關所 宇小名次村 高尾山追分

伊奈 御代官所 上栲田村字河原宿 宇原宿 宇新地 田安殿領 長沢直治郎知行 散田村

宇新地 伊奈 御代官所 八王子十五組内 本郷宿 千人町 八木宿 八幡宿

八日市場 日光街道 追分 横山宿 相州 川越 追分制札前 甲一里廿七丁 制札方本陣迄百〇五間横 〇八間四尺 廿二間二〇メ外

横山宿八日市場宿 一ヶ月代二駅 外二仕越 新町迄 甲八丁 合二里廿五丁 三十〇間 三十二間四尺 先手 坂部

梁田 上田 箱田 平助 小佛駅方無測ニテ上栲田村へ行 高尾山を測

高尾山百喜寺藥王院 御朱印七十五石 本尊藥師 護摩堂 經堂 鐘樓

飯綱大権現 本地不動明王 末社六ヶ所 唐銅 五重塔 元龜元年北条氏康建立 中興破却江戸赤坂某再建

坊中十八院 山中二浄土院阿里 余ハ山下ニ在 境内大木多し佛法僧ト云鳥

啼ト云 右寺ノ中門方測初 ○二十二丁、 二十〇間二尺 後手ハ 九ツ前

先手ハ 九ツ後 八王子 横山宿に着 止宿本陣 川口七郎兵衛 脇鯛屋勘治

ハツ半此方雨 深更方大雨朝ニ至ル

口語訳

文化八年（1811）五月五日（新曆六月二十五日）、天気は曇り、先発は六ツ（朝五時）過ぎに宿泊地の小仏駅を出発した。後発の私たち（下河辺、青木、永井、長蔵）は、伊奈助右衛門御代官所である武州多摩郡上長房村の中の小仏の宿泊地から始め制札までは一町二十七間（160m）、字摺差、高尾山細道、上長房村内駒木野、宇新井、高尾山追分を通過し、駒木野驛制札まで測量した。ここまでの距離は二十四町二十七間（2,67 Km）である。途中高尾山追分地点に測線の接続点として㊦の印を残して来た。

駒木野驛制札から小仏の関所までの距離は五町五十四間（640m）である。小仏の関所を過ぎ、宇小名次村、高尾山追分を抜け、伊奈御代官所の上栲田村字河原宿、宇原宿、宇新地を通り、田安殿領で長沢直治郎知行の散田村字新地、伊奈御代官所の八王子十五組のうち、本郷宿、千人町、八木宿、八幡宿、日光街道追分、八日市場、相州川越追分の横山宿にある制札前まで測量した。小仏の関を出てからここまでの距離は一里二十七町八間四尺（6,89 Km）である。横山宿の制札から本陣迄は百五間（190m）、二十二間（40m）ほどの横丁が二本ある。横山宿、八日市場宿は駅の役を一ヶ月交替で担当している。宿の外側、本陣から新町の外れまでは八町三十間（930m）あり、小仏駅からここまで全体で二里二十五町三十二間四尺（10,64km）になる。

先発は坂部、梁田、上田、箱田、平助の五人で、小仏駅より測量をせずに上栲田村へ行き、高尾山を測る。高尾山有喜寺藥王院は、御朱印七十五石、本尊は藥師、護摩堂、經堂、鐘樓がある。飯綱大権現、本地不動明王を祀る。末社六ヶ所、元龜元年（1570）に北条氏康が建立した唐銅（からかね）の五重塔がある。（その後中興により破却されたが江戸の赤坂某により再建された）。坊中に十八院、山中に浄土院がある。その他は高尾山の山の下にある。境内には大きな木が多い。仏法僧と云う啼き声の鳥がいるという。この寺の中門から測りはじめ、麓に本体が設置した㊦印まで繋ぐ。この間の距離は二十二町二十間二尺（2,44 Km）であった。

後発隊は九ツ（十二時）前、先発は九ツ過ぎに八王子横山宿へ着いた。止宿は本陣の川口七郎兵衛宅と脇鯛屋勘治である。ハツ半頃（午後一時）頃から雨が降り出し、深夜には大雨となつて朝まで続いた。



お知らせ

忠敬没後二百年記念行事の進捗について

渡辺 一郎

標記のうち、伊能測量への地元協力者の顕彰、スマホとGoogleマップ、伊能忠敬。史料館を結んで運用するデジタルスタンプラリーの企画が固まりましたので、進捗の概要を紹介します。

伊能測量地元協力者顕彰会

協力者子孫約百名（同伴者約三〇名を含む）の参加があり、3分の2が遠路からの御参加です。驚いております。これに加えて、来賓、会員、一般の参加は八十数名で満席となりました。ほかに寄付のみ参加された会員は約三〇名おられます。顕彰会は確実に成功すると思われま

デジタルスタンプラリー

アイホンの審査に、意外に時間がかかりましたが、OKが出ましたので、十一月一日から運用開始の予定です。十一月一日十四時に記者発表しますので、スマホをご利用の方はアプリをダウンロードしてお試し下さい。

伊能測量協力者調査のなから

伊能測量協力者の子孫探しのなかでこんな資料にお目にかかったので紹介します。

三陸の吉里吉里村の話ですが、測量日記では次のとおりです。

九月二十八日 朝六ツ半頃大槌町四日町出立。同八日町、大槌村、それより吉里吉里村（前川善兵衛なるものあり。富家にて世に知る所なり。尤も旧家として三四代以来は南部家中となり。富は古に遙に劣れりという。立ち寄りて一覽す）

前川家側には「不時臨時公私諸用留」という記録があります。史料吟味をしたわけではないですが、釈文が大槌町教委から刊行されており、これにより要点を対比してみます。

日程などの記述のあと、当家には前もって訪問したいと連絡があったので、待っていたところ家来一人をつれて山駕籠でお出でになったので、後に六代当主となる富長が出迎え、座敷に通し御挨拶申し上げたところ、気安くお話をされた。

お茶、餅菓子を出し、初めての訪問では酒は飲まないとのことであつ

たが、お酒とお吸い物、肴を差し上げた。そのあと自分の身元、測量のはじまった経緯、前川家の名前を聞いているので立ち寄ったこと、などを話し、江戸に来られたときは富岡八幡宮の近くで天文隠居といえは、誰でも知っているから寄つて欲しいといつて分かれたという。あと大沢峠（四十八坂）へ弁当を差し上げたら丁寧な御礼を述べてよこされたという。

似たような話は他でもあつたようにおもう。天文隠居といつて訪ねて欲しいという文言を記憶している。この状況をどう考えたらよいであろうか。忠敬が関心を持って訪問したことはあきらかである。地元案内人（案内しろというのは幕府代官経由で出された勘定奉行からの指令であつた）を通じてご都合よければ訪問したいと申し入れさせたのであろう。

前川側からみれば珍しい客人の表敬訪問であるし、幕府の仕事で巡回している時の人であるから歓迎して当然だろう。ただ、忠敬側から声をかけ、結果的にお酒まで出て、昼飯場に弁当までとどけているところを眺めると、忠敬先生も若干御用に便乗している感じがしないでもない。

しかしながら、いづれにせよ、お世話になったことは間違いないから、今回顕彰の対象としては問題はない。御子孫は参加予定です。

応募の中にはいろいろあつて、考え込むようなものもあるが、多くの応募をいただいたことに感謝いたします。

併せて、会員各位から予想を超える資金協力をいただいたことに厚く御礼を申し上げます。



ちゅうけいSUN



# 忠敬没後 200 年記念行事の進行について

2017 年 11 月 1 日 伊能忠敬研究会  
イノペディアをつくる会

来年は伊能忠敬没後 200 年にあたります。当会などが企画している記念行事の一部が確定しましたので発表いたします。

## 1. 伊能忠敬の全宿泊地をめぐるデジタルスタンプラリー 運用開始

- 1) 昨年 12 月 26 日に新聞発表した伊能測量隊の全宿泊地をめぐるデジタルスタンプラリー ソフトがアップルの承認を得ましたので運用を開始します。
- 2) 開始期日 2017 年 11 月 1 日 12:00 です。
- 3) スマートフォン（以下スマホ）アプリは、アップルストア（iOS 端末）、PLAY ストア（アンドロイド端末）から無料でインストールできます。
- 4) 伊能忠敬 e 史料館のデータベースと連動し、全国 3,000 点以上の伊能隊宿泊地点を検索、500 メートル以内に接近すれば、移動手段に関係なくスタンプをゲット可能。ゲットしたスタンプは自身のスマホで管理できますが、e 史料館でも管理でき、スマホを変更した場合もスタンプの復元ができます。
- 5) 県別測量回数別の探訪計画も可能。目標達成すれば達成証が表示でき、スタンプ帳も作成可能です

### 6) 説明資料

以下の「伊能忠敬 e 史料館」URL で説明しています。

<https://www.inopedia.tokyo/deGo/>





**【要約】**

全国の伊能測量隊が宿泊した地点に行き、スマホでスタンプするスタンプラリー。会員登録を行うと e 史料館と連携して、スタンプ帳、達成証等が作られる。他の会員の足跡を集計できランキング等を見ることも可能。

伊能で Go iOS 版 解説書(pdf)

<http://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/inoDeGoiOS.pdf>

伊能で Go アンドロイド版 解説書(pdf)

<http://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/inoDeGoiOS.pdf>

「伊能で Go My ページ 解説書」(pdf)

<https://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/MyPage.pdf>

YouTube 「伊能で Go」紹介 Movie

<https://www.youtube.com/watch?v=JQTtkUA04mA>

**2. 200 年前の伊能測量に協力した地元有志の顕彰事業は着々と進行中**

- 1) 2016 年 3 月に新聞発表した伊能測量協力者顕彰大会には、協力者子孫 100 名以上の参加確定
- 2) 参加子孫の 2/3 は関東地方以遠 期日は 2018 年 4 月 21 日 (土) 14:00 より
- 3) 伊能忠敬研究会員も 80 名が参加、資金を拠出して子孫を招待、会員代表より顕彰の辞を表明
- 4) 国土地理院長など関係団体からも御挨拶をいただく
- 5) 伊能忠敬研究会と伊能家当主が連名して 200 年前の御先祖に対し感謝状を謹呈
- 6) アトラクションとして立川志の輔の落語を上演
- 7) 翌日は都内の史跡案内、測量出発地富岡八幡宮に参拝、忠敬の墓碑のある源空寺で、200 年記念法要など

**参考** 御先祖に対する感謝状雛形を公表 個々の協力者ごとに事績を明記

以上



## 第50回「地図展」

昭和42年に第1回の地図展が開催され、毎年東京又は政令市や県庁所在都市で開催されてきた「地図展」が今年で50回を迎えた。地図展には当研究会も後援をしており、昨年の福島では伊能図の展示と鈴木代表の講演も行われた。記念すべき50回目の今年は、これまでの開催地とは異なり、東京郊外の多摩市で行われた。

会場の「パルテノン多摩」は多摩ニュータウンの中心に位置し、住民と近くの大学の学生で賑わっており、今年11月9日(土)に、当研究会の会員でもある西川治さんによる「世界地図の改良史における日本列島―コロンブスから伊能忠敬まで―」と題する講演が行われた。



講演をする西川治さん

## 新入会員自己紹介

静岡県 勝又 洋

静岡県の最北東に位置する小山町、この町に富士山の登山道須走口の麓に鎮座する富士山東口本宮富士浅間神社の門前町、須走の宿場があります。ここに、私の事務所兼寓居があり、四季の富士の姿を眺めながら生活しております。伊能忠敬は、第8次測量において、富士山麓を測量しています。文化8(1811)年11月25日、江戸品川を間宮林蔵の見送りを受けて出発。藤沢から大山街道に入り、阿夫利神社まで測り、足柄峠を越え竹之下村を通り、御殿場村に出ます。さらに当地、須走村に至り、富士山高を測りました。須走村では、当時隆盛を極めていた富士信仰、富士講の登拝者の定宿でもあった御師、米山久太夫(大申学)などに宿舎を定めています。往時、御師の家が連なっていた須走本通りからも、富士浅間神社の社叢と富士山が今も変わらず見えています。忠敬が投宿した御師の宿は、現在も旅館として営業していますので宿泊することができます。会員の皆様も、須走宿にお出掛けになり、古来の修験者達や忠敬と同じ道を歩み、登拝、遥拝、巡拝の旅をお愉しみください。

高知県

福田 仁まさし



私の母方の先祖は土佐・大津村(現土佐清水市大津)の庄屋でした。

昨年、同年代の親族と飲みながら先祖の話で盛り上がった際、「伊能忠敬が泊まったらしいよ」と聞かされました。

忠敬さん一行が土佐を測量したことは知識としては知っていましたが、われわれのご先祖が宿を提供していたとは…。

調べてみれば大津村の庄屋「上岡弁之丞」宅は忠敬さんご一行の「本陣」となり、夜は天測により緯度が計算されています。忠敬さん自身がそれを記録に残してくれており、子孫として感激もひとしおです。

高校時代は登山部に所属し、地図を読むのが大好きでした。大学時代は、山野で読図能力と走力を競う「オリエンテーリング」というマイナーなスポーツに夢中でした。46歳を迎え、「中高年の星」忠敬さんの生きざまに多くを学ぶことができそうです。よろしくお願いいたします。

埼玉県

井上 健



今年4月まで会員だった母、井上靖子(6代目伊能康之助長女)を引き

継いで会員にさせて頂く長男の井上健でございます。戦後まもなく佐原で生を受けており、伊能忠敬生誕後201年目という年回りでもあり、本人は勝手に縁を感じております。

多くの人の支援を得ながら、日本地図作成という生涯事業を成し遂げた生き方、業績に対して、少しでも理解を深めるように努めたいと思っております。何卒宜しくお願い申し上げます。

その他、以下の2名の方が入会されました。

千葉県 菅原佐知子さん  
福岡県 小坪 隆 さん

### 退会者

原田 照男さん、井田 福次郎さん、野崎 信行さん、芳賀 啓 さん、村上 昭三さん



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaiho@inoh-ken.org](mailto:kaiho@inoh-ken.org)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第84号)は2018年2月発行

原稿の切りは12月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています!

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org) (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150607286100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Inopedia (イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典 <http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料 <http://members.jcom.home.ne.jp/i-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料 <http://www.ti.rim.or.jp/~koko>

編集後記 ◇まずは発行が一月遅れてしまったことをお詫びする。◇予定の期日に原稿が集まらず、それでも何とか割り付け作業はしてみたが、そのまま発行するには躊躇せざるを得なかった。◇前号の編集担当も原稿の集まり具合と、原稿の内容には苦労したようだ。◇期限を守って発行するか、遅れても原稿の内容を精査して発行するか悩んだが、印刷物は後に残る。研究会の性格を考えると、遅れる方を選んだ。◇その結果、投稿

いただいた方には申し訳ないが、何篇かの原稿が掲載できなくなった。◇今後このような状況は続く可能性が高い。◇編集に当たっては、理事の皆さまにも査読いただき、意見を伺いながら進めて行くことにしているが、それには時間と原稿の完成度が高いことが必須である。◇次号に向けて投稿要領に従い、早めの原稿提出をお願いする。(T・H)